



## 江戸六組飛脚屋仲間について（続稿）

藤 村 潤 一 郎

私は「江戸六組飛脚屋仲間について」史料館研究紀要五号（以下前稿と略記する）で近世の六組飛脚屋、即ち通日雇とおしひやとについて研究したが、なお問題が残っており其後収集した史料もあるので、前稿の一部を訂正し、新たに気付いた点について記す。従って前稿を前提にして記するため一部に纏りの悪い点もあるが、今後研究を続け、将来更に問題を考えたいと思う。本稿では六組飛脚屋と主として記すが、六組即ち通日雇について用語を特に統一しない。

### 一 享保期の雇上下

享保六辛丑年仲春自序田中丘隅「民間政要」中編には、宿場における通日雇人足の姿が、上下雇又は雇上下として記①されている。著者田中丘隅は、田中兵庫と名乗って宝永四年頃から東海道川崎宿の本陣名主兼人馬問屋を勤めた人物である。

そこには往還の輩が公用を笠にきて、休泊には遊興する事を述べ、ついで

剩へ上下雇の者打交りて往来するにより、日頃宿々の案内は能く知たり、其所の者より功者にして、女有る宿々に

ては何屋の誰、何れの町の何某杯、其者を呼集め、夜もすがら遊戲しても、其価皆以払事なく、宿々の入用に成、其上屋はねむく成によつて、己どくか可持道具、自身に持事なく、鎗、長刀、挾箱、大笠、立傘の類迄人馬に是を持たせ、其驕だに有上に、又己々は皆馬駕を取て、心々に乗るといへど、何れに錢の出る事なく<sup>(2)</sup>

とその横暴を記るし、結局彼等以外にも同様の振舞をする者があるので、宿で集めた人馬では全く不足する。「関東西へ上下雇の者の分、道中の非道を稼と心得<sup>(3)</sup>」る不埒さを指摘するが、これについては、

同じ日傭の内にも、□上下の者程武家のこまり物はなし、泊り／＼にて宿につくといなや、よもすがら車座に居て、食も喰はずにばくちを打て、毎夜止事なし、夜の明方に及で度々御立と触来りても勝ちたる者はそれに事よせ立んとすといへど、負たる者は居すはりて打つ、只人の物言ふ事も耳に不入、度々責めてもまづ／＼として用を欠く、皆人立払て漸くに出て大きに呵られ、己が事はいはず、只宿々より申して来らずなど、不働の様に悪口雜言し、と宿に着くと博奕に夢中であり、宿、武家共にこの結果迷惑する訳だが、彼等は

人外の風情、切つても血も出間敷き体なれば、是等に構ふは損なり、とかくに其日傭代をひかへて質に取て、かし過せざるにしくはなし、縦ば直段高くば手附望むより、初めかし過さぬかよし、彼を致すと彼に致さるゝとは、只此事の外なし<sup>(4)</sup>

ときめつけてはいるが、日傭代を質にとる処など宿場も手は打つてはある。この事は雇上下の頭の者と宿とが連絡がある事を示している。でなければ貸した金は、質をとって回収出来ない筈である<sup>(5)</sup>。

彼等の風規は余り良くない。即ち道中本亭が困るのは諸道具が失くなる事で、碗、家具、重箱、皿鉢、燭台等、「夫きせる茶わん引盆の類の、袖に入易き物の器量の能きは失せ易し、是大勢の入込、殊に雇上下の者に雲助も打交り、夜中御立ちの砌り杯には、人我の見さかひなければなり<sup>(6)</sup>」。

更にその姿は「未々の中間にて雇上下の類の旅なれし者共、寒の内にもあはせ一つにして着て、衣類二つ三つ宛取てくるまり臥すに、翌日は日を日に乾して虱を掃ふに簀を以てす」<sup>(7)</sup>とあり、道具の持去、不潔等で宿には嫌われるが、矢張り交通労働者であり、その能力は

それ田舎の人足は常に鎌鋤農具の業にのみ力を竭して、肩の上荷物を負ふ事をせず、故に道中人足或は上下の雇、又は雲助等常々是のみを渡世として、朝夕肩の上修練したる力に及ばず<sup>(8)</sup>

として認めている。雇の上下の者も京都所司、大阪城代、老中の通行では余り不法をしないとしている。<sup>(9)</sup>この田中丘陵のみた雇上下の有様は後年も余り変化していない様である。

即ち享和元年三月植崎九八郎の上書<sup>(10)</sup>（「浅策雜収」所収）に

大名交代の往来手人は少く、大概下様は雇人にて重き荷をになひ、百里二百里の供を仕、賃錢わづか三貫文か四五貫文にて、畢竟泊々にて博奕仕、昼も小休の内に博奕仕、其勝負の勢氣計にて往来仕候事に御座候とあるのは雇上下の事だと推定される。

## 二 延 享—文 化

延享二年八月に江戸中上下飛脚屋六組の願により、東海道での小揚取悪党を取締る御触が品川から伏見迄仰出されたが、事の発端は延享元年に六組日用頭、割取、才領等が品川から小田原迄に小揚取、悪党に妨害されたからである。

これは「民間省要」中編に

道中にて諸家の駄荷物長持など廻しに来るに、足なしと言事有て、馬士日儲取のよりたかりて取廻し、市の如く高声して、人々何を言やら、相手もなきいさかひ、むしりあふ事常なり、是は定れる宿懸人馬の外の事にして、其主

人よりの才料共か又は所々上下の者共、それ〴〵貫目かけ、路銀受取来て、通し人馬もからず、宿々て其者共勝手次第に、かりて通る事にて、宿々問屋などの知る事に非ず、請負の者又は才料に所得あるを見込んで、馬士小揚取共のひそ〴〵とよりたかりて、それをむさぼる体の事なるは、江戸出の日第一にて、段々先へ行て事しづまる、荷物は途中に捨置で、終日いさひ暮し、何をするやらいつ共なく行くも有、又果は其所の本陣へ来て事を願て、裁許してやるも有、更に誠事にあらず、皆才料も人足も、邪の事を邪よりたかりて物する事と知べし、且又諸家の才料もかゝる事なくして、相立つ事あらじ<sup>(11)</sup>。

とある「足なし」であり、既に享保期には行なわれていた事である。

再び延享二年に戻ると、前記御触流の結果御奉行所から、

御当地上下飛脚屋共願出候者、東海道筋宿々小揚取立者共、段々理不尽成義多く有之、悪党共相募り、出立荷物等宿々ニ而小揚錢之外金銭ねだり取、或者荷物差留請負人共致迷惑候、高輪、品川宿、川崎、神奈川宿四ヶ所、悪党数多有之請負人共致難儀候間、吟味有之候様ニ致度旨訴状差出候

八月

とあり、これに対して同年丑八月に品川、川崎、神奈川、保土ヶ谷の四ヶ宿問屋・名主は、この様な不埒者は曾て見留た事もなく、見逃した事もないが、今後は若し見留たら捕置き訴える。吟味もせず見逃せば何分の御科にも仰付けられたいと証文を出している。<sup>(12)</sup>これは前記の「宿々問屋などの知る事に非ず」とする態度から出たものだろう。六組飛脚屋仲間と宿問屋とはこの点では連絡がすくない事がわかる。

以上は江戸近在の道中での事だが、「撰要永久録」御触事卷三十二<sup>(13)</sup>の安永四年二月「諸日雇役錢以来日傭座ニ而取集候旨」の町触は、諸日傭札役錢を江戸町年寄奈良屋市右衛門方に直接に渡すのではなく、日傭座喜右衛門方に渡す内容

だが、その内に、

一 上下人足之儀、他国々御当地江参、飛脚屋上下宿逗留之内、日雇稼ニ罷出候者共、右旅人差置候宿江札受取、銘々相渡、役銭差出可申事

とある。これは通日雇が江戸に到着すると、六組飛脚屋などに逗留し、江戸で日雇稼をする者がいた事を示している。従って六組飛脚屋の営業は道中の通日雇のみではない。

通日雇は参勤交代の人数中ではどの位の割合であらうか。中山道安中宿本陣の「御大名様方御泊御休帳」によると、明和五年四月二日泊の木堂伊豆守の場合には惣人数一四二人で、その内御払人数八〇人分、御雇払人数六四人分、合計人数一三九人分で外に馬二疋を四人として一四三人になっている。従って六四人が通日雇人数に近い数字ではあるまいか。<sup>(14)</sup> 四割五分に及ぶ。

そして宿と食事は、寛政五年六月二七日泊の榊原式部大輔の場合には、「御勘定方々札御渡膳と引替右札数ニ而御勘定申請候、雇方も木札渡右札ハ御本陣江取請不申、宿々日雇方割場ニ而直請取為致可申候」<sup>(15)</sup>とあり、同六年四月三日泊の伊木長門では、「御下宿九軒日雇方六軒」<sup>(16)</sup>の宿である。

次に同七年六月二〇日泊の榊原式部大輔では御旅籠御老人二三六文に対して御雇老人一三八文である。御下宿御本陣払は払方からであり、「其外ハ不残雇帳場払」である。会計も別建である。更に食事は御下宿御本陣御本膳は紙札と引替てその札数により賄代銭御勘定を申請けて下宿に渡される。雇方は木札を渡すが「宿屋共々直々日雇帳場ニ而請取せ申候」<sup>(17)</sup>とある。

最後に同八年五月二八日泊の榊原式部大輔については、「御下通り并ニ上下之者ハ日雇帳場々両取ニ為致、此方ニ而一向構不候申」<sup>(18)</sup>とある。

従つて宿、食事共に通日雇は別建であり、帳場が取扱い本陣とは関係はない。<sup>19)</sup>これが中山道以外でも同様かは後考にまちない。

この様な参勤交代などの仕事を大名の屋敷に出入して請負については、直接の史料ではないが文化一三年序武陽隠士某「世事見聞録」に、「当時武家に出入する諸町人諸職人等、先づ番人を始、部屋足輕中間小者等迄夫々音物を送り、又は棒先などゝ号して利分割を遣し、別て懸りの役人には格外の賄賂を入、或は遊所へ誘出し俱に女犯を致し、又は料理茶屋杯にて振廻いたし、誠に膝組になりて物事馴合<sup>20)</sup>」とあるのと、似た事情ではなかったか。

ところで文化元年七月二三日に東海道品川宿より大津伏見守口宿迄と美濃路佐屋廻り宿、中山道、日光道中、奥州街道、水戸通り、甲州道中の宿々本陣が通日雇の道中での不埒を道中奉行所に訴え、翌二年に和談が成立し、その際「宿方日雇方双方議定」が取替されているが、この間の事情については文化元年一〇月付道中御奉行所宛の東海道品川宿々大津守口迄佐屋廻り美濃路共宿々本陣惣代品川宿本陣市郎右衛門、川崎宿本陣兵庫の願書<sup>21)</sup>によると次の通である。

文化元年七月二三日に江戸六組日雇方と京都、大津、伏見の受負元締の者共が宿場に難渋を懸る理由で訴訟したところ、同年八月九日に双方召出され、猶双方懸合が仰渡された。

その結果江戸六組の者と交渉したが、六組の内で五組は日雇方・宿方双方の永続のために懸合を進めたが、残る一組である京橋組との懸合が進まず結局破談になり、再び訴訟するに至った。理由は京橋組が「六組之内ニ而も外五組之人數へ引合候程之多人數ニ而、殊ニ御諸家様方定御出入取メ之者少く、下請之者共斗御座候」ためとしている。

次に訴訟は、まず「御諸家様方御旅行之節、一体之受負人之外、重立候御家中別段受負人有之、欠<sup>ツ</sup>キ取受負<sup>（とら）</sup>が相唱、御大家様ニハ離れ受負人共何人も有之」とある。文意が判然としないが、諸家旅行には全体の受負人の外に、家中の重臣について別の受負人がいる場合があり、御大家旅行には欠<sup>ツ</sup>キ取受負人<sup>（とら）</sup>といつて幾人かの受負人で請負う事があり、こ

れを離れ受負人と称していると解釈したい。

宿々で不埒が起り、元締に懸合うとそれは離れ受負だから此方の差配でないとして処置出来ないの、欠き受負を行なわない事を求めている。

そして江戸六組日雇方一九四人の内、万石以上の御諸家様に定出入の者の名前を調べて宿に知らせておけば、「素人受負人安直段落札受負人相訳り、其上欠き取受負人下負之者共、再悪者共」に非分があれば、御奉行所に訴えなくとも、江戸六組年番行司で処理出来るから、名簿の件を実施したいとする。文中の前半は素人と入札での安落札者の排除だろう。欠き取受負人は前述の通りであり、下負は京橋組を考慮したのではないか。「再悪者」は読み方に問題があったのではないかと推測するが確認出来ない。

次に正徳五未年六月「宿々井間之村々へ御差出被為成下置候御触書<sup>(22)</sup>」を再触し、それを宿から宿々の間の村々役人に受印させて御奉行所に差上げる。更に五カ年に一度受印形をさせる事を求めている。

理由は宝暦初年迄は宿間の村の茶屋、立場、煮売、酒食の渡世は少なかったが、近年はこれら宿外の場合が繁昌するので、宿場の昼食、煮売屋が不振になるなど、本陣旅館屋共の渡世を奪い通日雇の不取締になるから、御触書受印形により農業専一の農村にする事であり、その際に箱根山八里はこれを除外するとしている。

この願書を載せている文化元年一〇月一〇日付宿々御本陣中宛の品川宿鶴岡市郎右衛門、川崎宿田中兵庫の書状<sup>(23)</sup>によると、一〇月九日に破談になったので追訴したものである。

追訴に際しては組頭羽田藤左衛門の吟味で、江戸六組の行司二人に対して宿方は難渋申立であるから懸合を申付けたのに未熟をせめ、「向後懸合不埒ニ候ハハ六組之内何レニ而も鑑札御取上ケ可被成冒蒙御叱」とある。そして一月八日迄日延になった。



触願は「日雇方懸合相濟以上ニ而御奉行様思召有之候儀ハ可相心得旨」が仰渡された。

以上の外に兵庫、市郎右衛門、隠居半兵衛は江戸六組と懸合のため、江戸へ日々出向き、奉行所に行く時には品川宿、川崎宿問屋並宿賄人共兩人宛差添を仰付けられているから、宿々ではその辺の事情を承知して貰いたい。又従来願書写を送ると老カ宿一日宛かかっているから、或三カ宿一日の速度を求めている。

そして追伸の形で神奈川から箱根迄の本陣に対して一〇月一六日に藤沢宿寄合を求めている。

六組と本陣との関係から素人受負対策として妥協の余地が伺えるし、京橋組の性格が下請の者が多く、人員も多い事、六組の元締の経営にも差がある事を示している。

### 三 文政二年通日雇取締方議定

文政二卯年九月六組飛脚屋山手組年行事中宛中山道宿々問屋年寄惣代「通日雇取締方ニ付宿方議定連印帳」<sup>(24)</sup>と、文政二卯年九月中山道安中宿御問屋年寄中宛江戸六組飛脚屋年行事「通日雇取締方議定連印帳」<sup>(25)</sup>によると、寛政元年四月に「道中筋小場所通日傭等之儀ニ付触書」<sup>(26)</sup>が出されたが、年月がたつて弛緩し宿々が難渋するので、東海道宿々が道中御奉行所に愁訴し上下通日雇六組と掛合になったが、宿方に不正をした者は六組仲間内御請負の者ではなく、組外の者であると六組が主張し、結局組内外の区別が分る様にして先年の御触の趣を守る事で落着し、東海道筋議定が文政二年六月に東海道宿々惣代から上下通日雇飛脚仲間六組年行事宛、及び上下通日雇六組一九四人惣代から品川宿御問屋御年寄中宛の各一札が作製され各写が道中御奉行所に提出された。両者によると内容は次の通りである。

1 諸大名、高家、二条大坂御番頭、遠国御奉行、其外の御用御通行の御方の「通し人足」を六組仲間中が請負った場合には、「何々誰様御通行にて通し人足何程ハ六組仲間之内何組何屋誰引請御供」の趣を出立以前に品川宿に迄先触し、

同宿から先々の宿に順達する。若し六組の内の請負方から先触がない際は六組仲間外とする。

御下向の場合には京、大坂、伏見、其外の御用場先からも同様の先触をする。

2御通行中に旅宿で（通し人足）が無賃の人馬をねだり、非分の事があれば、六組仲間中はその人足を取放し、宿方に代りの宿継人足を頼むので、その際には御定賃錢による。通し人足の内で病氣、足痛で扱えない場合には一四、五人迄を宿方は御定賃錢で貸す。

次に六組仲間外の者、即ち「仲間外他日雇又ハ其御屋敷江御出入致し候者共」が、その御役人に頼み「道中限り御抱入御徒士以下通し日雇等」を差出した者は、六組仲間では取締り難い。

六組仲間中が差出した通し日雇（通し人足）は議定を守る様にする。

3六組仲間中が引請た御通行については、従来契約通り御通行以前に問屋場に小指の者を詰させて取締らせ、御通行の通過する迄いて不取締のない様に世話をする。

4この取締について六組仲間では違反した者があれば、其際の請負人か、引請で罷越した者に宿方が懸合て始末一札をとり、その写書に事情を認めて六組年行事に提出すれば、六組年行事から請負人に糺して宿方に苦勞をかけない。

この一札に関連して、六組飛脚屋年行事から東海道宿々御問屋御年寄中宛の取締一札が作製されており、前記四カ条の一部重複しているが、それ以外に小指の者について、「取締之者老人宛宿々問屋会所前に御通行中詰居」せ、不取締の節には宿方は彼に懸合う。次に小指の者が詰ていない際に不取締があつても、人足には請負方から小指の者の件を申付てあるので、宿方は人足に取合ない。又通し人足が扱えない事情で宿方に人足を無心しても、成べく相対で間合せる。万一の際には詰合の小指の者から宿方に頼み、通し人足自身からの申出は取用ない。最後に泊り宿で陸尺、手廻りなどの人足が問屋場下役中に手代り、肩替りの人足を要求してはならない。そして荷持の者で小揚人足賃錢に差支るとして

泊り宿から賃錢を借請て返済しない者がある。以後は決して取替をせず、頼む者があれば請負人帳場にその旨を達する事になっている。

結局文化二年の「宿方日雇方双方議定」<sup>(27)</sup>の内で、宿での規定を細密化したと言えよう。

以上の東海道議定に準じて文政二年九月に議定一札が中山道宿々問屋年寄惣代から上下通日雇飛脚仲間江戸百九拾四人惣代宛と、上下通日雇江戸六組百九拾四人惣代から中山道安中宿御問屋年寄中宛に作製され、中山道の熊谷一坂本間一〇宿が会合して遵守を連印している。又中山道美江寺宿御問屋年寄中宛の上下通日雇江戸六組百九拾四人惣代年行司「通日雇取締方議定連印帳」<sup>(28)</sup>もあるから、各宿宛にこれは出されたのだろう。

#### 四 文 政—幕 末

参勤交代については、「五街道取締書物類寄」<sup>(29)</sup>にある文政六末年五月松平越中守問合に對する挨拶には

参勤交代之節ハ、国持大名ニ而も其家中ともニ、東海道は一日ニ五拾人、五拾疋、中山道其外之道中筋ハ貳拾五人、貳拾五疋ニ限り候御定ニ而、別段家中旅行之節、東海道ハ貳拾五人、貳拾五疋、中山道其外は拾三人、拾三疋ニ限、其余は手人馬又は通し日雇等相用ひ、右ニ而も不足之節は、全之稼人馬を宿々ニおゐて相對雇ニいたし候事ニ而、(下略)

とあるから、参勤交代では通し日雇は予定された存在である。<sup>(30)</sup>

この問合は松平越中守が奥州白川、総州竹ヶ岡・富津村から勢州桑名への所替に際してだが、所替について所替引越之儀ニ而一通り之旅行共違ひ候間、東海道、中山道共別紙之通御定賃錢ニ而繼立、右ニ而も不足ニ候ハ、手人馬又ハ通し日雇等相用候歟、宿方ニ而全之稼人馬を相對雇有之候とも勝手次第之事ニ而、尤相對雇は問屋

共江申談候而も不苦候

とある。従つて所替でも通し日雇は予定された存在である。

さて文政一一年九月一〇日付中村八大夫様御役所宛東海道品川宿役人惣代「通し日雇取締方請書」<sup>(31)</sup>には、道中筋で六組と地日雇の者が無賃の手代り宿駕籠を出させたり、休泊に際して頭立った者が宿方から錢を借受て博奕をし、宿役人や旅宿の者が制止すると逆に難題を持掛ける。以後は通し日雇については、その請負人に嚴重の御沙汰がある旨を申渡したから、名前を糺して申出る様に触れている。

従つて東海道では事情は余り変化していない。

宿側では米価などの騰貴により旅籠代が問題になるが、天保五年正月の箱根、小田原、大磯、平塚、藤沢、戸塚、保土谷、神奈川、川崎、品川宿本陣の申合議定<sup>(32)</sup>には、

一通日雇旅籠錢之儀ハ、老人ニ付何なりと積り江戸六組行事ニ懸合取極候筈、尤も右相究候ハ、早速上宿江申越し、御下り之分者是又組合之内初御泊之宿ニ而右ニ準し取極候筈

とある。結果は不明だが、ここでは通日雇旅籠錢の決定に本陣が参加している。

天保改革の結果、天保一二年一二月に六組飛脚屋は仲間差止になった。

同一三年六月三日付品川、板橋、千住、内藤新宿役員連印の御請証文<sup>(33)</sup>によると、仲間組合御停止により通日雇請負の者の仲間<sup>(34)</sup>は立置き難くなり、「已来同渡世之もの何軒出来候共差障申間敷」、日雇の者の不法は名前を糺して訴える様に申渡されている。

当時の道中では、同一三年一月付五街道御取締御用廻宿の荻野寛一宛の中山道安中宿問屋年寄の答書<sup>(35)</sup>には、「江戸、京、大坂、其他紀州和歌山、尾州名古屋辺のもの請負差出候通し日雇のもの共」が、御触が出ると不法は少しは改善さ

れるが、結局は元の儘になり、旅籠代が低額なのでその額で賄方をする、少しの事で難題を持掛け、名前を糺すと逆に迷惑させられるとある。

以上は街道筋での事だが、江戸では「天保新政録」巻之三に、天保一三年二月二五日付御触として

一日雇月雇入口之者、亦是道中通し日雇受負候者共、欠落奉公人引込置候族有之由、右体之儀有之候ては、欠落者穿鑿方等不行届不取締に相成候間、以来改方念入受合人を取置、賃錢之儀も向後引下げ方致、題帳え右名前等相記、支配名主へ差出置、何時改有之候共差支無之様可致

とあるから、通し日雇と日雇、月雇、役場并見付中間は、人宿と同様に取扱われている。人返し令の一環としてのものだろう。

嘉永四年に六組飛脚屋は仲間再興になった。安政六末年七月付の江戸六組飛脚屋通日雇仲間神田組年行事三河町三町目家主請負人津国屋徳右衛門から東海道伊勢路品川宿々伏見迄宿々問屋御役人中、御本陣御手代中宛の口演は、津国屋徳右衛門が大坂御在番大御番土岐丹波守の御登坂御通中通日雇を請負った際のもので、通行には小差、宰領、日雇人夫に我雑非分のない様申付けける。そして御手人及び立交りの素人の者と紛れない様に、「焼印相居腰札銘々ニ為提置」き目印にする。

酒食など代金払不足のない様にし、若し不払の者があれば申聞されたい。無賃人馬の借請と、荷物などを宰領の者が宿内下賄役衆の都合に任かせて酒代を申請する等の事があれば請負人が行く迄差留て置く事にし、その為荷物に延引しても宿方に迷惑は及ぼさない。

これらの事は道中奉行所からの仰渡もある事だから、「止宿先者勿論、御本陣近隣商家屋ニ至迄」徹底されたいとしている。

これは津国屋が大坂在番大番登坂請負に際してだから、同様の口演が各請負毎に宿々に出されたのだろう。

万延元年八月には通日雇仲間一同の名鑑改が命ぜられた。即ち品川宿々守口宿迄但シ佐屋路本坂通り宿々間屋、年屋、年寄御役人中、川々御役人中宛の六組飛脚屋通日雇仲ケ間各組年行事書翰には、既に安政三辰年に不取締を仰渡されたとある。これはまだ別史料による確認をしていない。

そしてこれに対して仲間はず遠国奉行其外御用で旅行の御屋鋪様方に素人の者が立交る事は、三都と伏見の仲間では取締れないと申立てたとあるから、恐らく道中での通日雇の不法が問題になり、仲間以外の者の仕業と抗弁したのだろう。

再応の札で、往古の通に仲間一同名鑑改を仰渡されたから、今回宿所を取調べ改板にして、各宿々に菟杖宛を送り、若し非法があれば宿方で名鑑と照合して、早便で年行事に通知すれば仲間が取調べ、場合によっては訴えて仲間から除き、宿方に迷惑をかけない。

そして宮家、高家、京・大坂在番、遠国奉行など御用で旅行の御屋敷の通人足請負の際には、従来通り出立前に請負人名前と御達書を送る。日雇人夫には「其組々焼印相居候腰札老人別ニ為提」て目印にする。素人が立交り「似寄之提札等持参」か「無札」で何かを宿に申出る者があれば、「宿所・名前共」を取調べ早便で年行事に通知されたいとしている。

従来と変った内容ではない。ただ腰札は若し御鑑札とすれば、文政五年には認められていないから、何時から許可されたかは明らかでない。

さて文久二年閏八月二三日「参勤在府割改制并政務協議書」<sup>(38)</sup>は、元治元年九月朔日「万石以上以下妻子国元へ引取并参勤之割復故之旨達」<sup>(39)</sup>により一応復旧したとは云え、この参勤交代の変化がもたらした六組飛脚屋に対する影響は現在

第1表 明治2年行啓  
通日雇人数表

人	1,263.0
松川	1,068.0
坂居	180.0
橋坂	737.0
田屋	1,013.0
名市	24.0
日	1,268.5
関	45.0
水	868.0
大	1,055.5
不	1,161.0
津	1,124.0
明	1,109.0
	1,114.0

府の瓦解にも生きのびたのだから。

最後に通日雇の道中請負証文は次の通りである。後欠であり、二カ所の継印があるが最後の箇所には継印がない。従って年月、請負人、宛名を欠くが、下書かそれとも後部を切断されたかは不明である。

#### 通日雇御請負証文之事

一從江戸屋鋪様東海道伊勢路通伏見迄御道中日數十式泊十三日限り員数也

一上御陸尺 老人ニ付銀百拾五匁

一中日雇 同 銀九拾目

但老人ニ付四貫目持手代も同断

過貫目は本賃銀割合

一平日雇六貫目持老人ニ付 同六拾五匁

但過貫目は本賃銀割合

一夜越追越御泊違何程御座候共、御陸尺老人ニ付銀貳拾貳匁五分ッ、中人平日雇老人ニ付銀拾五匁ッ、御増仕切

の処明らかではない。

維新の際については明らかでないが、「<sup>(40)</sup> 駅通明鑑」巻四第五編行幸行啓ノ部其ノ三によると、明治二年行啓の供奉通し人足旅籠銭は、同三年二、四月民部・大蔵両省合議の御下ヶ渡伺の際の「通日雇旅籠銭仕訳書」に第一表の通りである。

街道の全部ではないが、相当の人数である。恐らく通日雇は幕

候ニ付、右之外御増決而申請間敷候

但過メ目へも右割合可被下置候

一御定之日限相延候節は、御陸尺中人平日雇平均老人ニ付、銀六匁四分ツ、可被下置候

一川留其外居逗留相成候節は、過貫目共平均老人ニ付銀三匁五分ツ、被下置候事

一御廻り道御座候節は、平均老人ニ付、老里銀貳匁ツ、被下置候事

一佐谷御廻り御座候節は、平均老人ニ付、銀三匁五分ツ、被下置候事

一惣日雇明荷代老人ニ付、銀貳匁ツ、可被下置候

但過貫目へは不被下候事

一桐油笠損料老人前銀三匁ツ、可被下置候

一御陸尺<sup>カ</sup>鑿道具老人平日雇ニ而可被下候

此分川札貳枚可被下置候

一金相場六拾目立ニ而御勘定可被下候

右之通御定ヲ以御用用向被為 仰付、難有慥ニ御請負奉申上候処実正ニ御座候、然上は於御道中、御日雇之者如何

様之儀御座候共私

引請

御屋敷様へ少シ茂御苦勞相懸ケ申間敷候、為後日御請負証文仍如件

通日雇は上陸尺、中日雇、平日雇があり、中人とは中日雇であらう。道中の夜越、追越、延引、川留、廻り道等の規定、及び通日雇自身の明荷、笠損料なども定め、金相場六拾目立としているのは、道中各地で相場が違っているからで



ある<sup>(42)</sup>。

## 五 寛政元年の地域分布

寛政元年から幕末にかけての江戸六組飛脚屋仲間の人数は第二表の通りである。<sup>(43)</sup>

これら六組飛脚屋の江戸における地域分布について考える。

地域分類は文政期三島政行等編次「御府内備考首巻総目録」<sup>(44)</sup>と、明治四年一月東京府区別による。<sup>(45)</sup>なお御曲輪内の地域分類には便宜上明治一二年七月の日本橋、京橋、麴町、神田の区名を使用する。<sup>(46)</sup>

関係地図は第一図の通りである。

まず寛政元年の地域について考える。江戸定飛脚問屋島屋「万年帳」の寛政元年五月の江戸六組日雇頭仲間を、「六組飛脚屋旧記」の天明九年正月の仲間前書により補正した地域は次の通りである。記載は組別にし、地域名称、大・小区、町名、人数の順である。

日本橋組一二名

(日本橋) 一一五 本銀町一

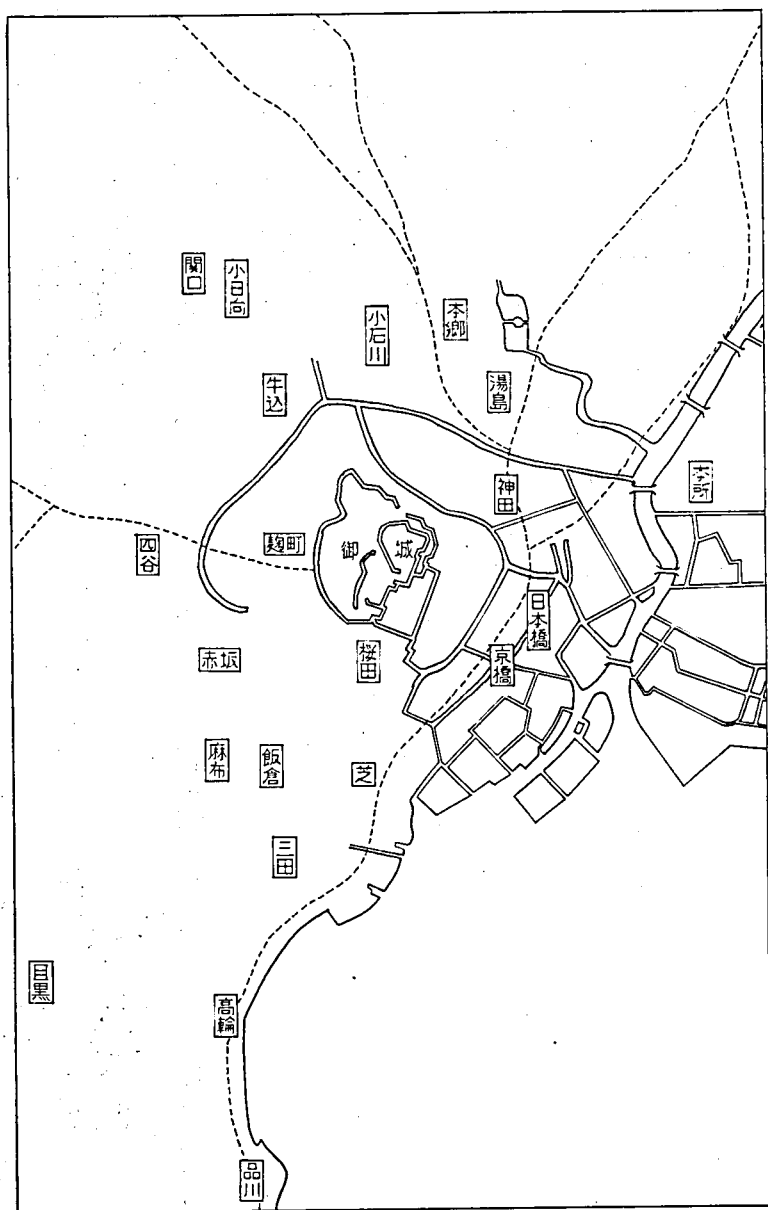
一一六 南老丁目(通老丁目) 一、木原店(通老丁目) 五、西河岸

町一、呉服町一、檜物町一、川瀬石町一、岩倉町一

京橋組五三名

第2表 江戸六組飛脚屋仲間人数表

組名	寛政元年 5月	嘉永4年 3月	嘉永6年 4月	安政元年 12月	万延元年 閏3月	慶応4年 6月
日本橋	12	13	12	12	13	11
京橋	53	58	55	52	55	65
芝口	20	24	21	22	21	17
大芝田	42	39	47	43	37	38
神之手	44	33	32	31	28	37
山	23	41	38	30	27	32
合計	194	208	205	190	181	200



第1図 六組飛脚屋関係江戸図

(京 橋) 一一七 南伝馬町三丁目一、南鍛冶町壱丁目一、五郎兵衛町四、疊町九、北紺屋町一、白魚屋敷二、常盤

町一、具足町一、柳町一

一一八 新両替町四丁目二、新両替町一、三拾間堀壱丁目一、南紺屋町四、弓町三、新肴町四、西紺屋町

二

一一九 尾張町壱丁目一、南大坂町二、宗十郎町一、滝山町一、守山町一、南佐柄木町二、加賀町三、八

官町一、寄合町一

(目 黒) 品川口 滝前町(下目黒町) 一

芝口組二〇名

(桜 田) 二一二 桜田備前町六、桜田鍛冶町二、桜田伏見町二、兼房町二

(芝) 二一二 芝口式丁目七

二一三 柴井町一

大芝組四二名

(飯 倉) 二一四 西久保天徳寺門前一、西久保下谷町一

(芝) 二一三 宇田川町一、芝浜松町三丁目二、芝新網町一

二一五 芝新門前壱丁目二、芝中門前式丁目一、同三丁目二、芝片門前一

二一七 芝森本町一

二一八 芝金杉三丁目一、芝西応寺町一二、芝通新町一、芝松本町三、芝新網町代地一

(三 田) 二一八 三田同朋町一

(高輪) 二十一 高輪庚申堂横町一

(品川) 品川口 品川南四丁目九

神田組四四名

(麴町) 三十四 元飯田町一

(神田) 一―四 三川町貳丁目六、同三丁目一五、同四丁目一、同(新道カ)一、皆川町貳丁目三、神田蠟燭町四、横大工町一、関口町三、雉子町四

(湯島) 四―五 湯島壱丁目一

(本郷) 四―四 本郷貳丁目一、同四丁目二

(小石川) 四―三 小石川下富坂町一

山之手組二三名

(麴町) 三―二 麴町貳丁目二、同七丁目二、同八丁目一、同九丁目二、麴町山本町一、麴町隼町一

(小日向) 三―六 牛込東古川町一

(牛込) 三―六 牛込築地片町一

(四谷) 三―九 四ッ谷坂町三

(赤坂) 三―十三 赤坂表伝馬町一丁目一、同貳丁目二、同三丁目一、元赤坂町二

三―十四 赤坂新町三丁目一

表示すると第三表の通りになる。即ち日本橋組は日本橋にのみあり、京橋組は目黒の一人を除いて全て京橋にある。

目黒は不動門前町として町地であった。<sup>(8)</sup>芝口組は桜田が多く、芝が若干ある。大芝組は芝が中心であり、その周辺の桜

第3表 寛政元年江戸六組飛脚屋地域表

組	日本橋	京橋	芝口	大芝	神田	山之手	合計
日本橋	12						12
橋		52					52
橋					1	11	12
町					38		38
田					1		1
湯					3		3
本					1		1
小						1	1
小						3	3
牛						7	7
四			18				18
赤			2	2			2
桜				29			31
飯				1			1
芝		1					1
田					1		1
黒					9		9
輪							
川							
合 計	12	53	20	42	44	23	194

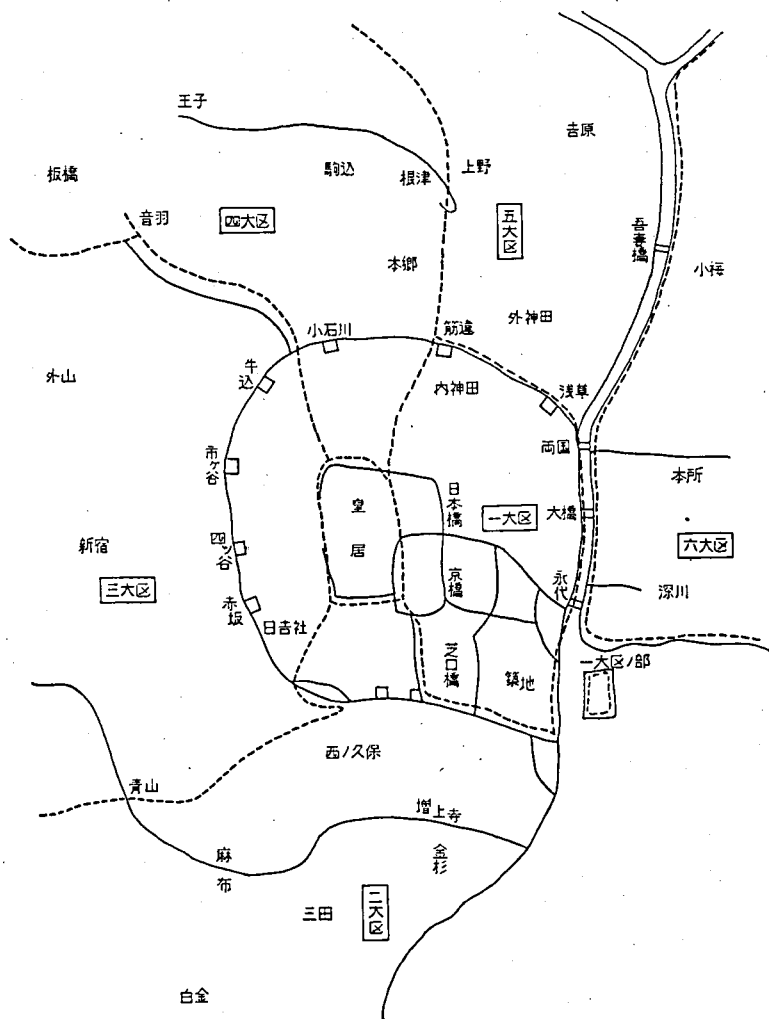
田、飯倉の外は東海道の品川とこれにつらなる高輪である。芝には増上寺があり、高輪も寺院がある。神田組は神田が中心であり、それも内神田に限定される。その外には神田周辺部の湯島、本郷、小石川であり、御曲輪内に京橋一人がある。山之手組は麴町が中心で、赤坂、四谷、牛込、小日向がこれに連なっている。

全体としてみれば御曲輪内一二四名、同外八〇名であるから、前者が五八％に当る。

なお大區別を記ると、東京六大区は第二図の通りであり、六組飛脚屋の大區別は第四表の通りである。第一大区が五三％、第二大区が二七％、第三大区が一二％になっている。

ここで江戸の性格について考えたい。明治二年九月の調査では、武家地一一六九万二千坪、寺社地二六六万一千坪、町地二六九万六千坪、合計一七〇四万九千坪余で、大略武家地六割、寺社二割、町地二割に当る。

明治三年五月の調査<sup>50)</sup>では武家地一一六九万二七九〇坪余で、その内朱引地内之分七六四万四〇二〇坪余、朱引外之分四〇〇万八五七一坪余である。杜地七万九一〇五坪、寺地二五八万一八四二坪で町地は不明である。明治二年の数字と似ているので同年合計坪数により計算すると、朱引地内武家地四四・八％、朱引地外武家地二三・五％（合計六八・三



目黒

第2図 東京六大区図

第4表 寛政元年六組飛脚屋大區別表

組	日本橋	京橋	芝口	大芝	神田	山之手	合計
第1組	12	52			38		102
第2組			20	33			53
第3組					1	23	24
第4組					5		5
第5組							0
第6組							0
第7組		1		9			10
合計	12	53	20	42	44	23	194

％、社地〇・五％、寺地一五・一％であるから、町地は一六・一％に当る。  
 次に「御府内備考」<sup>(51)</sup>は天明頃の「江戸図説」により、江戸町数凡一六五〇町余、その内町分一二〇〇余町、寺社門前分四〇〇余町であり、大名上屋鋪二六五カ所、同中屋鋪（但御三卿御屋敷并抱屋敷之分除之）・下屋鋪合四六六カ所、神社二〇〇余社（小祠除之）、寺院二〇〇〇余所とあり、明治二年の調査では東京五拾組（東京朱引内市中）では「町千四拾八町外ニ浅草寺地中三拾四ヶ院境内町屋、但、永代橋新大橋大川橋東西助成地共、此内ニ相籠、居留地区内新キ町屋其外合式拾八ヶ町住居人無之分共」とある。藩知事邸他共一二〇九一軒が武家屋敷に当るかは後考にまきたい。

これらの町、寺社、武家屋鋪は、今井登志喜「江戸の社会史的考察」<sup>(52)</sup>によると、「江戸時代の城下町には（中略）武士の居住地即ち屋敷町が必ず城に附属した外、更に城下を通過する交通線に添って町人町が設計されて居た事は云ふ迄もない。京橋から日本橋、神田又は浅草の一部に亘る江戸の主要商業街は、江戸を通過する自然の交通線に添ふ区域であり、最も都市的プランニングを示して居る所である。之は最初から城下町の町人町の形式に於て設計的に作られたものである事は、落穂集等の記事に待つ迄もなく、明瞭に図面の上から断定し得るのである。城の西及北の麴町神田に亘る旗本町と東方に南北に長い町人町とが、城下町としての基礎的な要素であり、大名屋敷は城下町から首府への進化により、第二次的要素として加はり、かくて特殊な地勢と相まって江戸の都市的外貌を極めて複雑なものにしたのである」とされている。この様な配置のなかで商業

街として主要なものは、新橋から本通りを経て日本橋から神田川を渡って御成街道に至る筋と、これから分れて日本橋本町又は本石町から浅草橋を渡る筋であり、これは京橋、日本橋、神田、浅草の一部に当るが、「京橋の河寄りの方面、日本橋の浜町・蠣殻町方面、神田の小川町・錦町・三崎町等の方面はみな其範圍外であつた。此区域は大体神田川が北の限界でその北では僅かに外神田の辺及び浅草橋外の小部分に延びて居るに過ぎなかつた」とあり、次に浅草、上野、音羽通り、深川八幡と門前町に近いものがあり、最後に新橋から品川に至る街道筋、神田五丁目から本郷六丁目に至る街道筋、下谷坂本から千住に至る街道筋、半蔵門から内藤新宿に至る街道筋、即ち五街道に添って郊外迄と江東の堅川、仙台堀川、大横川等の川筋に添って幅巾の狭い宿場的形狀の商業街に大別出来るとしている。

面積、町数、配置と考えたから最後に人数については、関山直太郎氏は中期以後一二〇万人と推定し、内訳は武士とその従者五二〇三万人、町人五三〇四万人、無籍者三〇五万人とみており、中期以後町人人口は固定しているとしている。人数では武家四七〇八%、町人が四八〇九%に当る。

これらの事は嘉永六年冬喜田川舎山述「守貞漫稿」に「江戸の盛なる者 都ての小売店 食店 武家調用之商人及雇夫の長 酒問屋」とある通りの性格を持ち、当然六組飛脚屋仲間もこの武家調用の雇夫の長としての性格があつた筈である。

再び六組飛脚屋の地域分布に帰ると、貞享四年藤田理兵衛作「江戸鹿子」には新橋南一丁目、同式丁目、杵町、日本橋南老丁目新道、石町三丁目、駿河町とあるから、日本橋、麴町、芝に当る。「六組飛脚屋旧記」では、延享元年には日本橋、京橋、芝口、本芝、神田、赤坂の各組があり、神田組は神田本郷組とも称している。全員の地域は不明であるが、行事と推測される者では、日本橋、京橋、芝、赤坂、麴町、本郷、神田である。天明七年には本芝組は大芝組であり、京橋組は京橋組と京橋南組にわかれる場合がある。



従って山之手組の前身は赤坂組である。これらと第三表とからすれば、六組は御曲輪内と、周辺の本郷、及び赤坂と芝が中心であったものが、江戸の発展と共に変化したものではあるまいか。伝馬町の問題については後述する。山之手組は寛政元年には麴町が多いが、人数と元名称からすれば赤坂中心から御曲輪内に移るとも考えられるが、「御府内備考」により江戸の市街地の移転経路を研究した松崎欣一氏<sup>(56)</sup>によると、近世初頭から享保にかけては、外神田、浅草、牛込、赤坂、麻布、飯倉、芝は変動期間が長く、下谷、湯島、本郷、小石川、雜司谷、市谷、四谷、青山、渋谷、三田、本所、深川が中程度としており、後者は深川を除いて殆んどが享保期以後移転による町の成立はないとしているので、山之手組の麴町と赤坂の関係は後考にまきたい。京橋組が内部で二組にわかれているのは京橋内で急速に増加したからではあるまいか。

なお寛政元年の家主(A)、店借(B)、不明(C)の区別は、日本橋組Aなし、B一二、Cなし、京橋組Aなし、B五二、C一、芝口組Aなし、B一九、C一、大芝組A一四、B二八、Cなし、神田組A五、B三九、Cなし、山之手組A六、B一八、Cなし、合計A二四、B一六八、C二である。家主が一二%、店借八七%である。

## 六 嘉永四年の地域分布

嘉永四年三月「諸問屋名前帳五十六 六組飛脚屋」による地域分布は次の通りである。

日本橋組一三名

(日本橋) 一一五 本石町壱丁目一、本両替町一、伊勢町二

一一六 通壱丁目三、元大工町一、川瀬石町三

(神田) 一一十一 神田紺屋町壱丁目一

(本所) 六一六 本所相生町貳丁目一

京橋組五八名

(日本橋) 一一十四 甚左衛門町一

(京橋) 一一七 桶町貳丁目一、南大工町一、五郎兵衛町二、疊町一四、北紺屋町一、金春屋敷一、大鋸町四

一一八 銀座貳丁目二、三拾間堀貳丁目三、京橋水谷町一、南紺屋町一、弓町三

一一九 竹川町一、宗十郎町一、滝山町二、南佐柄木町一、加賀町一

一一十 西応寺町代地一

(麻布) 二一六 麻布谷町一

(桜田) 二一二 桜田久保町二、桜田伏見町四、桜田善右衛門町一、兼房町一

(芝) 二一二 芝口壺丁目西側二、二葉町一

二一三 芝浜松町四丁目一

二一八 芝西応寺町一、芝通新町一

(目黒) 品川口 下目黒町一

芝口組二四名

(麻布) 二一六 麻布今井三谷町一

(桜田) 二一二 桜田和泉町三、桜田伏見町一〇、桜田善右衛門町四、兼房町二

(芝) 二一二 芝口壺丁目一

二一三 柴井町一、芝浜松町四丁目一

二一五 芝中門前巷丁目一

大芝組三九名

(京橋) 一一九 寄合町一

(神田) 一一十一 松田町一

(麻布) 二一七 麻布十番馬場町一

二一十四 麻布本村町一

(桜田) 二一三 桜田和泉町一、桜田伏見町三、桜田善右衛門町二、幸橋御門外本郷六丁目代地一、兼房町一

(飯倉) 二一四 葺手町一、天徳寺門前町一、西久保普門院前一<sup>(58)</sup>

二一六 神谷町一

二一七 飯倉町五丁目一

三一十四 芝永井町代地二

(芝) 二一五 芝七軒町一、芝中門前巷丁目一、同式丁目一、芝片門前巷丁目二

二一七 芝南新門前巷丁目代地五<sup>(59)</sup>

二一八 芝西応寺町二、芝横新町一、芝松本町二

二一十 芝田町六丁目一

(品川) 品川口 北品川式丁目一、同四丁目二、南品川後地町一

神田組三三名

(京橋) 一一七 疊町二

一一八 京橋金六町一

(麴町) 三―三 麴町卷丁目一

三―四 元飯田町一

(神田) 一―四 三河町貳丁目三、同三丁目五、同四丁目一、<sup>(80)</sup>皆川町貳丁目四、神田蠟燭町二、神田関口町一、神

田新銀町一、雉子町二

一―十一 神田鍋町一

一―十二 神田久右衛門町一

(湯島) 四―五 神田明神表門前一

(本郷) 四―四 本郷三丁目二

四―七 本郷四丁目一、本郷古庵屋敷一

(関口) 三―七 関口水道町一

(桜田) 二―二 桜田久保町一

山之手組四一名

(日本橋) 一―六 上槇町一

(京橋) 一―七 疊町一

一―八 南紺屋町一、弓町一

一―九 尾張町貳丁目一

一―十 木挽町六丁目一

江戸六組飛脚屋仲間について(統稿)(藤村)

(麴町) 三一 二 麴町老丁目三、同式丁目一、同八丁目一、同九丁目一、麴町山元町一、麴町谷町一、麴町竜眼寺

## 門前一

(神田) 一一 十一 須田町式丁目一、神田紺屋町式丁目一

(外神田) 神田六軒町一

(湯島) 四一 四 湯島六丁目一

(小日向) 三一 六 小日向東古川町一

(四谷) 三一 九 四谷坂町一

(赤坂) 三一 十三 赤坂表伝馬町老丁目二、赤坂裏伝馬町老丁目四、元赤坂町三

三一 十四 赤坂新町一

(桜田) 二一 二 桜田久保町一、桜田伏見町一、桜田善右衛門町三、幸橋御門外本郷六丁目代地一

(飯倉) 二一 四 天徳寺門前町二

(芝) 二一 七 芝新門前式丁目代地一

(本所) 六一 五 本所林町四丁目一

以上の通りであり、表示すると第五表の通りである。

日本橋組は大部分が日本橋にあり、他に神田、本所に各一名ある。京橋組は主として京橋にあり、御曲輪内としては日本橋が一名いる。他に桜田、芝があり、麻布、目黒は各一名である。芝口組は桜田が中心で、他に芝、麻布がある。そして京橋、神田は各一名になっている。神田組は神田が中心で、京橋、麴町、及び湯島、本郷が周辺としてあり、他に関口と桜田がある。山之手組は中心が二つある。即ち御曲輪内の麴町、京橋と、同外の赤坂、麻布である。前者の周

第5表 嘉永4年江戸六組飛脚屋地域表

組	日本橋 人	京橋	芝口	大芝	神田	山之手	合計
日本橋	11	1				1	13
日京		41		1	3	5	50
麴神					2	9	11
田	1			1	21	2	25
外湯本						1	1
神					1	1	2
田島郷					4		4
日向口						1	1
谷坂					1		1
布田倉						10	10
芝		1	1	2			4
飯		8	19	8	1	6	42
目品		6	4	7		2	9
本		1		16		1	27
黒川所				4			1
合 計	13	58	24	39	33	41	208

第6表 嘉永4年六組飛脚屋大區別表

大 区	日本橋 人	京橋	芝口	大芝	神田	山之手	合計
第1大区	12	42		2	24	8	88
第2大区		15	24	31	1	10	81
第3大区				2	3	21	26
第4大区					5	1	6
第5大区							0
第6大区	1						1
第7大区						1	1
品川		1		4			5
合 計	13	58	24	39	33	41	208

辺に日本橋、神田、外神田、湯島があり、後者には四谷、飯倉、桜田がある。そして本所と小日向が少しはなれてい

る。結局御曲輪内は九九名で、同外は一〇九名であるから、前者が四八%に当る。

大区別では第六表の通りで、第一大区が四二%、第二大区が三九%、第三大区が一三%に当る。

以上の事からすれば、寛政元年から嘉永四年迄の約六〇年間に御曲輪内の比率が約割一低下しており、京橋組、山之手組に麻布、桜田、飯倉、芝が出現している。

御曲輪内の低下は、基本線としては神田の減少と桜田の増加による。京橋の筑波町から桜田久保町へ一名、芝口式丁目から桜田和泉町、桜田伏見町へ各一名の所替が確認出来る。

前記松崎欣一氏の研究<sup>(62)</sup>によると、元文期から文政期にかけて外神田と桜田への近距離の町の移転がみられるとゆう。従って御曲輪内からのものではないから、六組飛脚屋の移動とは直接つながらないが、桜田の増加の一背景にはなるだろう。

大区別では第一大区が一％減少、第二大区が一二％増加、第三大区は一％増加である。矢張り御曲輪内から城南地区に地域が若干移動と考えてよい。<sup>(63)</sup> 武家屋敷の地域的な分布変遷との関連については明らかでない。

## 七 伝馬町と通日雇

江戸には公用の伝馬役を負担する者として、日本橋に大伝馬町、南伝馬町、小伝馬町があり、前二者を両伝馬町、三者を三伝馬町と称した。両伝馬町の拝領屋敷があり、四谷伝馬町、赤坂伝馬町がこれである。<sup>(64)</sup>

「御伝馬方旧記」の享保一六年九月御奉行所宛三伝馬町名主、惣町人共「京、大坂、伏見其外他国々通シ馬ニ而参リ逗留之上江戸附出之儀、其外取メ之儀ニ付願一件」<sup>(65)</sup>によると、少し文意がとり難いが、武家の参勤にはその領内の馬持と、京、大坂、伏見の者が通シ馬と人足を請負って江戸に来る。江戸ではその人馬は旅宿して逗留するが、御参駕の江戸附出し馬として武家駄賃荷物をその帰り馬が請負う事が、鞍判制度から江戸の馬持で問題にされるため、江戸宿の者がこの点を心得て、旅人共からこの事を申出させて、それを三伝馬町の内月番の名主に届けて差図を請てから勤めさ

せる様にしたいと願っている。この京、大坂、伏見の者とは通日雇であり、旅人と云われている彼等の全部が江戸の六組飛脚屋に逗留する訳ではないが一部は逗留するから、当然江戸六組飛脚仲間と伝馬町とは関係があったろう。

次に享保一一年と推測される「脇馬等申儀御尋ニ付書上一件」<sup>(66)</sup>によると、両伝馬町で多数の馬を必用の際には、両伝馬町抱置と四谷、赤坂に脇馬を申ける。その他は人馬共に両伝馬町から「御定賃錢之外、相對ニ而増錢」を渡して近在の人馬を雇って勤める。

更に急御用伝馬で両伝馬町、四谷、赤坂でまに合ない時には、「日本橋、京橋、中橋、柳原辺江在々所々々稼ニ罷出居申候出馬、并御発駕之御方様御屋敷御近辺向寄ニ而御定之賃錢之外増錢相渡雇候」とある。この御発駕御屋敷と六組飛脚屋との関係は実証はないから推測に過ぎないが、文化年間の素人請負の実態からすれば、少しは六組飛脚屋も伝馬町と関係はあったのではあるまいか。単に人足のみの問題で仲間は関係ないかもしれないが。後考にまきたい。

## 八 定飛脚問屋と六組飛脚屋

定飛脚問屋と六組飛脚屋との関係については、「定飛脚問屋和泉屋『万年帳』について」歴史四二輯で取扱ったが、今後更に研究する事にし、ここでは寛政元酉年より天保五年マテ写、嘉永三戌年改之「仲間定法帳」<sup>(67)</sup>により天保期の関係を記す。

天保二年九月御番所宛定飛脚問屋仲間年行事島屋佐右衛門の答書は、六組飛脚屋が「京大坂飛脚屋」の看板を出しており、出入御屋鋪から幸便飛脚用を請負った場合にはこれを定飛脚問屋に渡し、六組飛脚屋が自分から幸便物を集める事をしない対談がなされており、その業務は「多分御大名様方御交代御日雇、又は供付通日雇之者人請負渡世ニ而、私共下組手先と申訳ニハ無御座候」としている。この対談とは文化一四年の両者間議定をさしている。



両者の關係の一部として借金証文を示す。

株數書入借用申金子之事

一金拾五兩也 但近用文字金也

右者我等年來家業體飛脚取次用向貴殿方江御願申入、無滯相統致來候處、近來種々物入多差支申候ニ付、無拋御願申入請人立會、前書金子株式書入鏈ニ借用申候處衷正ニ御座候、利足之儀者壹ヶ月金貳拾兩ニ壹分割合を以、來辰三月晦日限元利共急度返済可申候、尤右金子為引宛我等年來御出入仕候御屋敷様并芝御山内御宿坊御寮方、道中通日雇、地日雇、御在前表江飛脚御用御請負致來候御名前左之通り

播州赤穂城主 備中成羽

森 勝藏様 山崎主税助様

但州村岡

山名主殿様 金地院様

智恩院様 増上寺御山内

御宿坊

御寮方不殘

右御名前様方御用向書入置申候間、万一期月ニ至リ返済相滯候ハ、前書之名前御屋敷御寺院方御用向ハ勿論、家業体相付候持株帳面之通、拙者々々相願貴殿江無相違御引渡可申候、其節ニ至リ彼是異変之儀申間敷候、猶親類ハ不及申、聊外之故障之儀者勿論、他家書入之儀ハ一切無御座候、為後日書入借用請人加判依而如件

芝片門前老丁目安兵衛店

天保二卯年九月七日

和泉屋甚兵衛殿

前書之通致承知候上は、万一異変之義も御座候節ハ、持株は勿論、御出入御用株共、早速為引渡可申候、為其印形致置候処依而如件

飛脚取次所并道中通日雇請負六組仲間

借用主 伊勢屋佐兵衛

麻布上野町喜三郎店

引請証人 木具屋伊兵衛  
親類惣代

大芝組通日雇六組仲間

年行事

万屋金五郎

そして「右之通証文取置貸遣し、尤利足之儀ハ一ヶ月金百両ニ付七拾五両之割ニ也」としている。伊勢屋佐兵衛は「諸問屋名前帳」には単に「芝片門前老丁目松五郎店 伊勢屋佐兵衛」とのみあるから、嘉永四年には営業しており、明治初年迄休業、譲、転宅等の事はなく存続している。

この証文によると大芝組伊勢屋佐兵衛の営業は飛脚取次の業務は定飛脚問屋和泉屋甚兵衛と関係があり、資金的援助もうけている。しかし手先と云われる程の関係ではない。大名、寺院の道中通日雇、地日雇、御在前表への飛脚の業務は、播州赤穂の森家、備中成羽の山崎家、但州村岡の山名家と、寺院の金地院、智恩院、増上寺の宿坊、寮に出入している。

この様な六組飛脚屋と定飛脚問屋の資金関係が滞った場合の処置は、定飛脚問屋が飛脚取次業務は吸収するだろうが、通日雇等の業務については具体的な事は不明である。少なくとも文化一四年の議定から直接参加はないと言える。文化二年村井店京屋弥兵衛「大細見」<sup>(68)</sup>には、万延元年申七月改之として江戸六組飛脚屋大芝組芝南新門前一丁目代地家持の政田屋源兵衛、江戸定飛脚問屋の和泉屋甚兵衛、京屋弥兵衛連名の宇和島様御買方御役人衆中宛の願書がある。署名には共に仲間名、所替はない。

内容は、御館様御飛脚御国向について旧来仰付けられてきた事を記るし、今回の御館様中仙道御下向についての御用状六日限、七日限仕立を仰付けられたが、その賃銀を六日限仕立は金七両三步式朱、七日限仕立は金六両三分、両者共に目方は四百匁迄で、それ以上は尙貴目に付銀五拾匁の割合、更に十日限仕立は金四両三分、目方は四百匁迄でそれ以上は尙貴目に付銀四拾五匁の割合として、その承認を求めている。

「大細見」に記載されているから同年以後の規準として採用されたと考えられるが、ここで取引のある六組飛脚屋と定飛脚問屋が、合同して御用状について願書を出している事は、前記議定が万延元年にも効力を有していた事を示している。

## 九 番組人宿と六組飛脚屋

安政六年著万延元年増補の成島柳北「柳北新誌初編」<sup>(69)</sup>には、  
妓を命ずるの家二戸有リ焉。岡崎屋と曰ひ立花屋と曰ふ。共に同朋街に在リ。即ち芳原郭内、見板と称する者。(中略) 故に岡崎立花の二戸も亦見板と称するを得ず。蓋し名は否して実は同じき者也。其業傭奴を養ふ。都俗人宿と称する者、故に又飛脚屋の名有リ。蓋し人を養つて以て妓の従价に給す。岡崎立花合せて三十人許、其の他業

とする者有りと雖も亦微なり。酒樓川長柏屋の若きは亦自ら奴を養ふ。而して専ら業とする所の者は二戸而已。妓及び酒樓船舖皆二戸を呼んで箱屋と爲す。其の奴を呼んで回箱（まわし）と曰ふ。

とある。ここでは箱屋が飛脚屋と呼ばれる事と、人宿と飛脚屋が同義語として意識されている事に注目したい。

「市中取締書留」の慶応二年四月番組人宿年行事の申上書によると、番組人宿は、徒士、押、足輕、下座見 但御門御番所三土手其外見付平足輕水打中間共、辻足輕 但御大名一手持は勿論日割交代 辻は右ニ准候ニ付人宿渡世稼方ニ御座候、陸尺、手廻、平中間、定御火消役場中間、既 但御馬飼と相唱候も有之、御役場爲之者、道中通日雇、地日雇 但拾人之多人数受負候儀は人宿稼方ニ御座候、駈付人足、御軍鑑水夫火焚夫、寺院、医師、新吉原廓内働奉公人、品川宿内藤新宿旅籠屋働奉公人、町方男女奉公人 但旅人宿湯屋蕎麦屋春米屋太物店荷背負其外諸国出稼之者有之候ニ付何商売ニ不限奉公任受判仕候 尤遊女売女或は端々飯盛又は酌取奉公人等之受判一切不仕候、道中飛脚、宿々持出し人足を取扱うが、その内で主として取扱うと言えるものもあるが、申付られ次第差出す営業であるから、何れがと判然とは言えないとしている。この内に通日雇がみられる。

文政九年「六組仲間規定帳」には、下請負、小差の者、陸尺、奴、手廻り、平日雇の者についての規定があるから、番組人宿と六組飛脚屋の営業には類似点がある。そして両者共に内部には親分子分的な結合が共にあったと推測される。(補)

ところで文化一三年五月「江戸拾老番組問屋判形帳」(補)では人宿は二四五人である。「天保撰要類集 人別之部」(補)の天保一二年九月二〇日付水野越前守宛遠山左衛門尉・矢部駿河守「在方々御当地江出稼之もの帰農并人別等之儀取調申上候書付」によると、天保一一年の番組人宿寄子惣数は人宿共申立によると三万五一四三人であり、「但、寄子之内重立候者之内ニは店持居候も可有之候得共、其余多分市中人別外ニ御座候」としている。

第7表 番組人宿人数・変動表

番組	嘉永4年 (A)	休業他 (B)	以後加 入(C)	休業他 (D)	(A)+(C)	(B)+(D)	明治 2年
一	39	16	6	1	45	17	42
二	47	30	9	1	56	31	34
三	43	24	1		44	24	30
四	41	13			41	13	33
五	44	20	2	1	46	21	34
六	40	11	2	2	42	13	33
七	46	15	4		50	15	44
八	42	22	5	1	47	23	36
九	46	11	4		50	11	45
十	41	23	3	2	44	25	22
十一	49	28			49	28	33
合計	478	213	36	8	514	221	286

「諸問屋再興調」<sup>(73)</sup>の嘉永四年八月町年寄「人宿取調申上候書付」によると、同年人宿は四八二人で、その内で天保一二年以前から従事してきた者は三四六人、同年以後新規の者一三六人となっている。

「諸問屋名前帳」<sup>(74)</sup>の人宿によると、番組人宿は一一組あり、嘉永四年三月には四七八人、明治二年末（一部に明治四年一月の記事があるが）は二八六人である。その間の休業等は第七表の通りである。

表中の以後加入は嘉永四年以後加入の略であり、休業他とは嘉永四年、以後加入の両者の内での休業他を示す。休業他は、休業、家出、謫、欠落、追放等であり、その内では休業が圧倒的に多い。加入とは休業跡引受加入等である。

嘉永四年分について一度でも休業した者は四四・六%あり、従弟相続で屋号変更の者で相続以前に休業の記載のない者一〇人を休業とみなせば四六・七%になる。

次に嘉永四年以後加入者三六人の休業率は二二・二%である。三六名の加入理由は休業跡加入、相続加入、組替加入、分ケ等であり、内三四名は前の組が判明しているから株数が考慮されている様である。

嘉永四年、同以後加入を機械的に合算すると休業等の率は四二・一%～四四・九%に当る。そして明治二年二八六人は嘉永四年四七八人の五九・八%に当るから、休業者の一部には再開、休業跡加入が行なわれていた事を示している。

第8表 江戸六組飛脚屋人数・変動表

組	嘉永4年 (A)	休業 (B)	譲 (C)	新規加 入 (D)	休業 (E)	合計 (A)+(D)	休業 (B)+(E)	慶応 4年	応 年
日本橋	人13	2				13	2	11	
京橋	57	19		29	3	86	22	64	
芝口	24	11		9	5	33	16	17	
大芝	39	14		17	4	56	18	39	
神田	33	9	5	12		45	9	37	
山之 手	41	16	2	6		47	16	32	
合 計	207	71	7	73	12	280	83	200	

次に「諸問屋名前帳五十六 六組飛脚屋」による六組飛脚屋は嘉永四年には二〇七人、慶応四年に二〇〇人であり、休業、譲、新規加入等は第八表の通りである。

即ち嘉永四年の年で休業した者は三四・三％、これに譲を加算すると三七・七％になる。休業者七一人中で再開した者は二人に過ぎない。この点は番組人宿とは異なっている。新規加入者は新規加入として処理されている者であり、その休業率は一六・四％である。

嘉永四年、新規加入の合計での休業率は二六・八％に当る。従って条件の差を考えなければならぬが、休業率は番組人宿が六組飛脚屋より高い。そして休業が再開につながらない場合は六組飛脚屋の方が圧倒的である。

次に六組飛脚屋の慶応四年二〇〇人は嘉永四年二〇七人の九七・六％に当るから、新規加入の形をとっているにせよ株数が矢張り考慮されている。

番組人宿と六組飛脚屋の構成員は、六組飛脚屋に対して番組人宿は、嘉永四年は二・三倍、明治期は一・四倍である。

以上の事を前提にして六組飛脚屋で番組人宿を兼業している者について考える。「諸問屋名前帳」であるから、両者は同一人であっても休業、所替等の届出の年月は一致しない場合があり、一方には所替等を全く届出ていない場合もある。従って兼業を、嘉永四年及び六組飛脚屋に新規加入、番組人宿に加入の年月にのみ限定して考える。これは田中康雄編「江戸商人名前一覧——江戸時代後期を中心とした——」三井文庫論叢六号に

より調査した。

両者共に一致する者をA、名前と町名は一致するが、店と家主、家持と家主、地借と店とかの点で相異なる者をB、名前のみ(店名のみも含む)一致する者をCとすると、嘉永四年の者では、日本橋組A三、B一、合計四人、京橋組A一四、B一、C三、合計一八人、芝口組A八、B一、C一、合計一〇、大芝組A九、B四、合計一三人、神田組A五、

B三、合計八人、山之手組A一一、B一、合計一二人である。結局A五〇、B一一、C四、合計六五人になる。

この六五人は番組人宿では、一番組四、二番組三、三番組五、四番組一七、五番組六、六番組九、七番組九、八番組四、九番組四、十番組二、十一番組二になる。

これは六組飛脚屋の三一・四%、番組人宿の一三・六%に当るから、三割の兼業である。矢張り六組飛脚屋は番組人宿に近い性格があるといえよう。

次に嘉永四年以後に六組飛脚屋で番組人宿に加入した者は京橋組A二、B一、C一、大芝組A一、神田組A三、B一、C一、山之手組A三、B一、合計一四人である。

逆に番組人宿で六組飛脚屋に新規加入した者は京橋組A三、芝口組A一、B三、神田組A一、B一、合計九人である。

全部で二三人で、番組人宿では一番組一、二番組二、四番組三、五番組四、六番組二、七番組二、八番組六、十番組二、十一番組一となる。

この八八人について営業、休業の関係をみると第九表の通りになる。途中加入の

第9表 江戸六組飛脚屋兼業関係表

六組	人宿	日本橋	京橋	芝口	大芝	神田	山之手	合計
営業	営業	人4	13	3	6	10	5	41
営業	休業		4	3	2		4	13
休業	営業		6	6	5	3	4	24
休業	休業(早)		2	1	1	2	1	7
休業(早)	休業			1			2	3

者を含む点を考慮しなければならないが、四一人が兼業を続けている。六組飛脚屋の方を休業した者で神田組の内一人は休業後営業を再開している事実がある。

次に両方共に休業したが六組飛脚屋の方を早く休業した者で芝口組一人は僅か一カ月の差である。これは実質は同時と解してもよいと思う。山之手組の内一人は休業ではなく譲であるが便宜上ここに入れた。

さていずれかを休業した四七人の内で、六組飛脚屋の方は二七人、番組人宿の方は二〇人である。それで兼業者中で休業しない者四五・三%、六組飛脚屋休業三一・四%、番組人宿二三・三%になるから、前述の六組飛脚屋と番組人宿の休業率と性格とを考えても、嘉永問屋再興後の兼業では番組人宿の方に比重が懸られていたのではあるまいか。

明治初年に兼業している四二人は、六組飛脚屋の二一・〇%、番組人宿の一四・七%に当るから、六組飛脚屋では兼業は嘉永期の七割に減じている。なお元治元年二月「十一組人宿年行事」<sup>(補2)</sup>では人宿四〇八人、明治四年七月「十一組人宿年行事」<sup>(補3)</sup>では同二一五人である。

東海道の遠州敷知郡舞坂宿問屋場「永代控」<sup>(76)</sup>によると、明治三年七月一九日に東坊城様御荷物の通人足を勤めた東京神田裏四丁目雇頭小杉太助に属する畑名門次郎事藤吉が今切船中で腰痛が起り、木賃宿で休息したが風毒の病症のため八月には東京雇頭に宿村繼で送る事になっている事実がある。

「諸問屋名前帳」によると、小杉屋太助は三河町三丁目新兵衛地借として人宿(二番組)であるから、恐らく同一人物と考えられ、明治初年にも番組人宿は通日雇を請負っていたろう。しかし前記明治四年には見当らない。

なお明治五年一月三日制定の奉公人請宿渡世規則<sup>(77)</sup>には、東京府第七二号として「是迄奉公人之儀ハ番組人宿又ハ口入渡世之者トモ致世話来候処、中ニハ猥ケ問敷致世話候モノモ有之哉ニ相聞候ニ付、従前之人宿口入渡世之名義相廃シ、自今別紙之通り雇人請宿規則相設候条(下略)」とあるから、名義は変更されたが営業は存続している。



明治七年一二月刻の服部誠一「東京新繁昌記五編」には、「京鴉家 一名雇人請宿<sup>(78)</sup>」としてこの間の事情について、昔日公侯の幕府に朝するや、品川より入り千住より来り、新宿より板橋より士卒の群、四時山を作し、人馬の声、昼夜を湧かす。排列路を埋め、喝道行<sup>カクダウ</sup>を啓く。着府発駕、出入織るが如く、一日の間幾千なるを知らず。是れ皆一年の勤番也。勤番多ければ則ち傭夫随つて多く。傭夫<sup>ジョウフ</sup>履奴<sup>リョヌ</sup>既隸<sup>キリ</sup>。暴助<sup>ボウシュ</sup>を連ねて無慮数万、曾て京鴉家の繁昌なる推して能し知る可き也。

と旧幕時代の人宿について記るし、次で

維新以降、公侯邸を縮め傭夫を大いに減じて、京鴉家の減ぜざるは何ぞや。一つは手を居宅寄宿の周旋に下し、一は喙を權妻外妾の媒妁に容るゝが故也。としてゐる。

## 十 道中人足廻しの話

宮崎三昧「雲助」<sup>(79)</sup>は、「僕、古物なりと雖も、天保にあらざれば、五十年の昔を目撃したるにあらず。我が年頃召仕へる老僕長吉は、壮年の頃、道中人足廻しといふ事を勤めたるものなり。今その語るところによりて、僅かにその一斑を記するのみ。長吉在焉。幕政時代五十三次の状況、僅かに伝ふべし。渠も亦或意味に於て徴すべき文献なる哉」とあるから大正五年以前の聞書である。柴田宵曲氏の解題では昭和二年七・八月に雑誌「慧星」に掲載された由である。

いずれにせよ東海道を往復した道中人足廻しがその晩年に壮年期の想い出を語ったのであるから、問題はあつたが、実態の一斑を知るのは可能であらうと思う。さて

「足ツキ」といふがある。これは大々名または有福の大名が、江戸から国許まで、雇いきりで人足を連れて行く

のである。これはまた強勢（きやうせい）なものだ。江戸の町人に人入れの元締というのがある、いずれも出入りの大名から扶持をもらっている。芝の政田屋、三河町の相政などというのがそれだ。この元締が請負って、何百人でも人足を入れるのであるが、これがすべて本相場で賃金の下がるので、その入用は莫大なものである。

とある。この足ツキは通日雇の事と考えられる。元締はこの人名では六組飛脚屋か番組人宿か決定出来ない。人入れとあるから後者かもしれないが、ここでは通日雇の実態を示すものとして取扱う。通日雇が参勤交代では相当の出費になる事を示している。

そして出立前には、江戸屋敷で必ず長持の貫目を計る「カケマエ」が行なわれるが、その際には荷ぐ捧の中に鉛を入れる等の策略をする上に、見分の役人には袖の下を遣わして置くから、結局「凡そ九匁のシイノミ玉（鉄砲玉）三千で一長持と決まっている」事になる。つまり二七貫目を百貫目とする訳である。

そこで元締の利益は莫大であるが、更に道中では「夜増し」「朝増し」と提灯をつけた時間丈け増分をとる。その上に「山増し、川増し」等もつけるので、利益があり「元締の暮しというものは、非常に贅沢を極めていた」とある。

この元締の下に「シタ馬」と「小差」があり、道中人足の宰領に出る。

シタ馬は人足の世話焼をする。即ち人足は一里毎に飯を食うが人数が百、貳百人であるから、到着後ではまに合ないため一行に先立って準備をする。普通の茶屋では長持の飯は盛らず、定見世である長持茶屋を貫目茶屋と称する。シタ馬はこの所在を知っている事が必要であり、又実際に長持の上げ下げも差図するから、人足を勤めた者でなければ出来ない。

次に小差は「銭クレ」とも云う。「古渡唐棧（こわたとうざん）の着附、脚絆、草鞋、一本差という。ちょっと幡随院長兵衛のようなこしらえて、人足に附いて歩き、町場（元締）から金を受け取って、宿の払いから、髪結銭、落し紙まで、人足に関することは一切賄いをする」。人足は江戸から連れて来るが、皆裸であるからの生活全部をみる訳になる。その他に道中人

足に對して、彼等を雇わない代りに渡り錢を払う。これが錢クレである。

道中人足は、助郷から出る百姓の「地人」、百姓か宿の者が朝に馬を引いて来るのが「出馬」、雲助の「宿人足」にわかれるが、錢は宿人足に渡す。酒手は「町場の難易と次の宿までの遠近、雲助の顔の好しあしを見分けるのが甚だ困難な仕事」ではあるが、「この団体へくれる惣花はまだまださのみ困難ではない。すでに団体でもらった上に、また個人でブラリともらいに来るやつが難中の至難物だ」として、「一升ぶり」つまり二百文を請求する奴はよいが、「黙ってもらいに来たやつが甚だいいけない。そいつの顔を見分けてくれやらないと、小差でも元締でも、忽ち頭へ拳固がお見舞い申すのであるから、どうしても道中を度々して、木曾でも東海道でも、有ると有るほどの雲助の顔を熟知しているものでなければ、満足にゼニクレの役は勤まらない」。宿毎に相場が違い、雲助によっても異なる。それで「頗る器量を要し、大いに胆力を要する」。

酒手の錢は、大名により酒手が決まっております。それでは不足するがその補足は小差の腕である。「凡そ<sup>てし</sup>て酒手の賄料一日百十六文、宿泊料二百人、都合三百六十文ぐらいで済むのであるから、半分以上あまる。それが二百人前も三百人前も受け取るのであるから、その余錢が非常に高だ。そこでその内から酒手を出して、その残りが小差のもうけになる。だからうまく酒手を多くくれ過ぎて馬鹿にされる。沢山やりさえすれば顔がよくなる訳には行かぬもの」としている。

元締が小差を選抜するには「頗る奇抜な方法を用いた」とし、久保町の元締「万伝」が「箱根の三<sup>び</sup>」という裸の雲助を小差にしたのは、酒手が少ないとして雲助の彼が元締をなぐった機会に直ちに見込んで採用された。語り手の長吉が小差になったのは、元来彼は小田原の元締「米五」の子分であり、伏見から帰ってきて小田原の酒席で上方の事等を高話していたのを、隣りの部屋で仙石讃岐守の御立ちに人を探がしていた「万伝」の小差が聞いて彼を推薦し、元締に会

された。元締は名前も聞かず即座に雑費五〇兩と飲代二兩を渡して帰ったのが採用決定であつた。採用された長吉はその時に表を通りかかった荷持の頭の勘次に話をつけて彼をシタ馬にしたとある。そのシタ馬が人足を集め、定紋の付いた法被五〇枚下されて出来あがりと言う訳である。

久保町の万伝も六組飛脚屋が番組人宿か明らかでない。既に述べた通り想い出であるから性質上問題はあるが、これ迄の考証からすれば、道中での通日雇の実態をある程度迄は伝えているのではあるまいか。今後の研究にまきたい。<sup>(82)</sup>

なお六組飛脚仲間から安芸の厳島神社の舞台前に銅灯籠、伏見の御香宮に石の水鉢が献納され、島田宿の諏訪神社の石灯籠には名が刻まれている由である。<sup>(相4)</sup>

## 十一 駅通司御用人足

慶応四年閏四月二日に明治政府により駅通司が設置せられ、明治二年七月八日民部省に所屬、ついで八月一二日民部、大蔵兩省の所屬になった。同三年一〇月には駅通司に郵便掛が置かれる。更に同四年駅通察に昇格する。陸運会社の設立に伴ない同五年には一月一日の東海道から始まって八月末には全国的に宿駅制度が廃止される。<sup>(83)</sup>

この間、明治三年三月一二日付民部省駅通御役所宛六組飛脚問屋通日雇仲間行事総代京橋組年行事福島屋所左衛門、大芝組同近江屋久五郎願書<sup>(84)</sup>によると、仲間は是迄駅通御役所御掛りで道中日雇御受負渡世に従事している。その点では幕府時代と基本的には相違はないと言える。

明治元年一〇月御東幸御入笠以来は駅通司が非常出火の際には、冥加のため年行事が差添で駄付人足三〇人差が許出され御鑑札三六枚が下渡になってきたが、御曲輪御門々の夜分取締りについて鑑札の引替を機会に、同三年三月一四日民部大蔵兩省合議では非常駄付人足規則がたてられたので、仲間の駄付人足差出を差止に決定し、三月一八日には六組

飛脚問屋通日雇仲間総代両人は差止と鑑札返納について御請印形を提出し、また聴訟掛から駄通局に宛て返納分鑑札三枚の請取がなされている事実がある。これは江戸城への駄付人足が、明治期にも継続していたのではあるまいか。

これより先明治二年六月に、駄通司は「諸官司并ニ諸家ヨリ差立相成候荷物等」の取扱を、混雑のため東京伝馬所に移しているが、これに六組飛脚屋と番組人宿が関係している。

この事実については既に金子一郎氏の指摘があり、本稿も教示をうけた事を銘記しておく。

明治二年前記御伝馬所取建に伴ない駄通御用人足請負、即ち御用物類口宿持出其他運送人足の差入は山鹿屋安次郎、有馬屋清右衛門が請負になり、疊町組合持地借人宿渡世尾張屋吉蔵、同筆屋徳次郎が下賄を勤めた。その際に西久保広町七番組人宿近江屋望月十左衛門、南鍋町壱丁目文助地借九番組人宿柏屋善弥八は人足御用仰付を御直段入札書で願ったが沙汰がなかった。<sup>(87)</sup>「諸問屋名前帳」によると、山鹿安次郎は六組飛脚屋日本橋組であり、有馬清右衛門は六組飛脚屋神田組で二番組人宿でもある。下賄の二番組人宿尾張屋吉蔵は六組飛脚屋京橋組である。同じく下賄の同筆屋徳次郎は見当らない。しかし六組飛脚屋京橋組に疊町七蔵店尾張屋吉蔵が慶応二寅年三月二日に家主になっており、同組で疊町七蔵店筆屋喜三郎が安政五年六月に新規加入しているから、筆屋とこれとの関係は後考にまきたい。

ここでも六組飛脚屋と番組人宿の営業が通日雇としては類似している事を示しており、下賄から六組飛脚屋仲間内部にその営業に大小があった事がわかる。

明治三年六月に近江屋十左衛門、柏屋弥八は再び駄通司御役所に「東京ヨリ所々ニ御差立ニ相成候御用物持夫御用人足御用」仰付を願出た。条件は壱人賃銀一一匁五分宛、御荷物賃目は七貫目から拾貫目迄は壱人持積りであり、拾貫目以上は御定賃目より三分増である。

これは再応の札により六月一五付願書では壱人銀七匁七分宛で、過賃目は変わらないが御定賃目以下の分は銀六匁宛、

御急御用の際は賃銀七匁、式人分極急御用の際には三人分下になった。

七月九日付駅通司御役所宛奥書によると願通り許可された。

八月一八日付願書では、八月朔日・一四日御用の際に御用物御差出になり急用同様に勤めたが人足賃銀は五分増都合老人半分を願っている。

一方この結果前記下賄の尾張屋、筆屋は失業したが、八月二〇日付駅通司様御用人足請負願を出している。条件は従来人足下賄であつたとして七貫目持老人代銀六匁七分、七貫目迄老人代銀五匁である。

この結果八月二九日省議により、直下げ願が将来出てその度に請負申付は繁雑であるからとして、九月一五日に民部省は東京府に、府下同業渡世の実直の者に入札申付を命じた。その際の人足遣高並入札振合御見合としては、凡人足二五〇人で口宿四ヶ宿持出、人足老人賃銀を七貫目持と七貫目以内、次に御用状について口宿迄時間九分五厘の急歩、時間七分六厘の至急歩、時間五分七厘の大至急歩の賃銀である。

入札に際して、一〇月五日付東京府御役所宛の南伝馬町御伝馬人足請負人南鍛冶町與四郎地借橋本由次郎、大伝馬町御伝馬人足請負人大伝馬町老丁目音二郎地借倉橋武次郎の駅通御役所御用人足請負賃銀入札額は、口宿四ヶ宿持出シの人足老人賃銀(七貫目持)四匁八分、同(七貫目以下之分)四匁五分であり、同じく御用状は急歩四匁五分、至急歩六匁七分五厘、大至急歩九匁であつた。そして両人は従来御伝馬役御用人足を請負ってきたから、今回も差支なく御継立をするとしている。

そこで一〇月九日省議は両人の落札を認めている。

一〇月付年寄共申立によると、南鍛冶町一六番地橋本由次郎は、「拾坪五合借地柿葺平家自分家作」に住み、家族は其身、妻、倅、娘、父母、召使老人の七人である。年来南伝馬町で勤め御伝馬人足世話方をしていたが、現在は日雇人

足雇入方をして生計を立ており、「身元宜敷モノニハ無御座」いが、人足方は功者である。これ迄に多人数請負った場合でも差支なく勤め、「金融等モ出来候モノニ付可成ニ相暮」しているとしている。

次に大伝馬町老丁目音次郎地借倉橋武次郎は、建家は間口貳間半・奥行三間半であり、二階建は貳間半・九尺で、平家は貳間半・貳間半である。旧来から大伝馬町にあり、家族は其身、妻、男子老人の三人である。これ迄年来大伝馬町御伝馬人足世話方雇入等をし、御用人足を滞りなく勤め、明治元年に御先鋒様大御総督宮様入着から凱陣迄人足等の大御用を勤めた。身上は「宜敷ト申程ニハ無之候得共質素ニ相暮」している。そして是迄に人足大御用等の際には大伝馬町二丁目文右衛門地借麻苧問屋山内利助が身元を引受て金子等を融通しているとする。

結局閏一〇月九日に御用人足請負は西久保広町望月十左衛門、南鍋町老丁目善弥八の御用向差免、前記橋本由次郎、倉橋武次郎の御請印形差出で落着した。

この御伝馬人足世話方<sup>89)</sup>、明治になって日雇人足雇入方を勤める者の營業が近世に六組飛脚屋と番組人宿と何様な關係にあつたかは今後研究したい。

明治四年正月には信書郵便の東京府下賃錢切手売捌候処に望月十左衛門の名がみえている。<sup>90)</sup>

明治五年七月三日夜横浜一〇時発の郵便御用人足、即ち郵便脚夫を羅卒が打擲し人足方倉橋武次郎が郵便御役所に申告し、駅通寮が東京府に「郵便之何物タルヲ不知」、「何様下賤之者タリトモ政府ノ務ヲ奉シ候者」と掛合っている事実があり、同年一月には御用人足方倉橋武次郎が駅通寮から横浜川崎其外口駅へ持出し御用の際に人足に御用人足法皮着用させたいとして製造伺を出している。<sup>92)</sup>従つて倉橋武次郎の請負は続いている。

さて宿駅制度廃止、陸運会社、陸運元会社、郵便制度といった明治初期に六組飛脚屋がどうなつたかは、現在の処明らかではない。<sup>93)</sup>なお六組飛脚屋日本橋組大津屋については別稿に譲る。

註

(1) 川崎市役所編纂「川崎市史 通史編」二七七—九三頁。

要約すると最初は義父に代って里正になり、宝永四年六月二十三日に義父三代目兵庫歿、田中丘隅は兵庫と改名し川崎宿名主兼本陣を勤める。これが義父歿時か以前かは読取れない。ついで川崎宿の間屋、本陣、名主を兵庫一人が勤める事になった。正徳元年には間屋役丈は辞したとある。

(2) 澁本誠一編纂「日本経済大典」五卷二四三—四頁

(3) 「同右」二四四頁

(4) 「同右」三四二頁

(5) 昭和一五年六月三島古老座談会(安政元年—慶応元年生)によると、東海道三島宿の人足部屋は、伝馬継立の間屋場裏にあり、部屋人足(間屋場人足、宿場人足)で起ている者は殆んど博奕を打って暮らす。人足指と云う部屋頭が人足賃から刎銭をとる。人足部屋賭場では部屋頭直系の者が常住で代賃元、壹振り役をする。無一文にすった人足は部屋頭の指図で労役に出る。手巾、禪を仲間に質入れしても、受け戻しのすむ迄は他の品物で代用出来ないから、また賃元から銭を借りる。結局部屋頭の搾取の連続としてい

る。「三島市誌」中巻四五—六頁。この部屋人足即ち雲助と雇上下の生活は極めて類似している。「三島市誌」は「大宿とか城下町の雲助には、或る時は間屋場人足を勤め、或る時は通し日雇人足として大小名の荷物を江戸京阪

の如き遠隔の地に運搬する者もあった」(中巻四五九頁)としているが典拠は記していない。

なお久米邦武「駅舎と木賃」(大正五年刊日本歴史地理学会編「日本交通史論」四七〇—一頁)には、参勤交代で「主君は本陣に宿され、家老は必ず前後の宿に泊る。(小身大名は別)中老、番頭には札宿(幕宿)其以下に駕籠宿(切棒)垂籠(並宿)と油紙の人夫宿など、階級があった。(中略)油紙は油紙にいろは号を書たのを張出した人夫宿である」とある。

「民間省要」(「前掲書」三三七頁)には、夜具について「雇の者どもきて本亭へ入込む分は皆借る事なれば、其数夥し、本亭によって皆他より借て出す損料物なり」とあるから、本陣と彼等の関係は前記油紙とも違うらしい。従ってその博奕の場所が人足部屋かどうかは不明である。

(6) 「日本経済大典」五卷三二七頁

(7) 「同右」三二七頁

(8) 「同右」二四二—三頁

(9) 「同右」二五—六頁

(10) 「日本経済大典」二十卷五三三頁

(11) 「日本経済大典」五卷三四〇頁

(12) 品川町役場編「品川町史」上巻七九七—八頁

(13) 東京都公文書館所蔵

(14) 安中文化会編「中山道安中宿本陣文書」七三〇頁

江戸六組飛脚屋仲間について(続稿)(藤村)



- (15) 「同右」八三三頁  
 (16) 「同右」八三八頁  
 (17) 「同右」八五三頁  
 (18) 「同右」八五八頁  
 (19) 中山道蔵宿岡田本陣の天保期から幕末にかけての本陣宿帳を研究した蔵市史編纂委員会編丸山雅成執筆「蔵市の歴史」二巻は、「下宿(本下宿)」と陸尺宿・日雇宿の何れか一方とが並記されている例が多いが、この後二者は通し日雇人足等の宿所とみられる。一定の宿所を本下宿と見るか、日雇宿と見るかは、その止宿者によるが、根本的には宿料によって決まる」(二三頁)としている。なお「油紙宿も日雇宿とはほぼ同じ性格のものであるが、表中では別扱いにして出した」(二二四頁)として同一かどうかは決着をつけていない。

同書の紹介している天保一四年五月九日御休の清水中納言の場合には、日光社参であるが、本陣の外に御家老御用人衆御下宿六軒、御惣御供方御下宿七拾軒で、外に通日雇式百人の宿六七軒となっている(三七二頁)。

- (20) 本庄栄治郎、土屋喬雄、中村直勝、黒正巖共編「近世社会経済叢書」一卷三三頁  
 (21) 磯貝正主任編纂「保土谷区郷土史」上巻七五〇—一頁  
 (22) 大蔵省編纂「日本財政経済史料」九巻二九一頁に  
 御伝馬宿之外、間々村々煎売茶屋にて近年狼旅人沐浴宿

致し、又は茶立女等差置、旅籠屋等も仕馴、近在々之駄賃等雇荷物附送り致候処も有之、本宿之障に相成候段相聞、不届之事に候、向後子細有之者格別、軽き旅人たり共猥成儀有之者、宿致候ものは不及申、其処之名主年寄迄曲事可申付候

一伝馬宿之外、往還之間々村々不埒之儀も有之様子に相聞候間、宿々へ被仰出候御条目之趣を以、本宿へ承合可相聞候、可訴出儀も其通に致し置、後日に相知候はと可為曲事もの也

正徳五年

大隅印

未六月

石見印

宿々

問屋

年寄

(新選憲法秘録三)

- (23) 「保土谷区郷土史」上巻七五一頁  
 (24) 「中山道安中宿本陣文書」六〇—一五頁  
 (25) 「同右」六五—九頁  
 (26) 石井良助校訂「徳川禁令考」前集第六「三四三七」七七—八頁  
 (27) 「五街道取締書物類寄」上(児玉幸多校訂「近世交通史料集」一)七五五—八頁  
 (28) 岐阜県編「岐阜県史」史料編近世七「二六」一二三—一五

頁

(29) 「近世交通史料集」一 四九八、四九九頁

(30) 明治四一年旧膳所藩領水居士平田好「懷郷坐談」七二—

三頁には、江戸参勤として「御発駕前日用人以上并元締、

郡奉行、町奉行、京留守を被召於御居間拜謁御意（在城中  
出精相勤太儀猶亦留守中入念相勤候様）有之」として、

此日於二ノ九門前に奴見分有之供頭、勝手方、徒士目付  
立会一同御酒被下

按ずるに奴見分とは鎗持挟箱持陸尺中間手廻り之者  
共道中御供の行装を演ずるを云

とある。同様の事は特に奴見分は、江戸からの発駕の際  
にも考えられる。日用人以上と元締が通日雇かどうかは確  
認していないが、可能性はある。

(31) 大阪経済大学日本経済史研究所「東海道草津宿史料（奥  
村家文書）」(1)三三頁。なお「大阪経大論集」四三号五五  
頁にも所収されている。

(32) 片岡永左衛門「駅鈴餘音」一五—一六〇頁（石野瑛編「小

田原及箱根史料」武相叢書第四編所収）

(33) 「日本財政経済史料」九卷四六二頁

(34) 「中山道安中宿本陣文書」八九頁

(35) 「日本経済大典」四五卷六〇七—九頁

(36) 「品川町史」中卷五二—三頁

(37) 素人ではないが、仲間以外の通日雇がいた事は、文化七

江戸六組飛脚屋仲間について（統稿）（藤村）

年正月に「御手代山口與作殿両掛宅荷物送候於途中ニ、鉄  
物等固辭放し衣類等盗取遁去」った東海道南品川宿喜兵衛  
店巳之松方差置の平四郎の事件（「品川町史」上巻七九五  
頁）によっても知られる。

(38) 「昭徳院殿御実紀」（「続徳川実紀第四篇」新訂増補国史  
大系五一巻三七〇—六頁、「徳川禁令考」前集第一（四三  
四）二八三—四頁、東京都編「東京市史稿」市街篇第四十  
六 七七—八九七頁

(39) 「徳川禁令考」前集第二（六二三）七七—八頁、「東京  
市史稿」市街篇第四十七 三九九—四〇三頁、「続再夢紀  
事」第三（日本史籍協会本）二九二頁

(40) 「駅通明鑑」卷四（通信博物館蔵）五六—七丁。

なお明治元年十月、御東幸御用掛會計官出納司宛の三島  
宿「諸家様御昼弁当御小弁当取調書上帳」（三井高陽編「御  
東幸御用記録」一卷四〇四—六頁）には、備前侍従兵隊九  
四七人に対して乗馬六疋、通日雇九七人であり、山内兵之  
助兵隊三九七人に対して乗馬四疋、通日雇二七五人、加藤  
遠江守兵隊二六六人に対して乗馬一疋、通日雇八五人、つ  
ぎに鍋島鷹之助兵隊一六六人には乗場一疋、加藤大蔵少輔  
兵隊五六人には何もなしとなっている。

御東幸における通日雇は後考にまちたい。

(41) 通信博物館所蔵

なお燗畑雪湖「江戸時代の交通文化」五六—七頁には、

## 東海道通人足請負証文之事

從江戸御屋敷伊勢路通り伏見迄御道中日数十二日限

一刀脇差指 一人ニ付 賃銀 六拾四匁分ツ、

一平人足 一人ニ付 同 六拾四匁八分ツ、

但シ御荷物六貫目持 六拾九匁ツ、

一御長持貫目 十貫目ニ付 同 九十五匁四分宛

但シ一棹二十貫目ヨリ一人六貫目持賃銀二百五十匁ツ

一御棺舁 一人ニ付 賃金 二百五十目宛

一六人掛御駕籠舁 一人ニ付 同 九十四匁三分ツ、

一四人掛同 一人ニ付 同 八十五匁一分宛

一通馬 一疋ニ付 同 二百五十七匁宛

一佐谷廻 一人ニ付 同 二匁五分

一山崎廻リ 一人ニ付 同 十五匁五分ツ、

一美濃廻リ 一人ニ付 同 七匁參分七厘

但シ其外御道中御廻リ道不時御用有之候節ハ忍辱太守様御旅行御供御定之通り御証文前御定被遊可下候事

一中国路通人馬直段之儀右東海道直段日割ヲ以テ被下候事

一今度同海道御用通人足某請負仕候上ハ随分念ヲ入能人

足差出御用無滞相動可申候若人足ノ内取逃欠落等仕候ハ、其色物相改御差図次第代銀ニテ払上可申候若又人足ノ内不達者仕候歟又ハ相煩御意ニ入不申者御座候ハ、其所ヨリ能人足早速立替御手支無之様ニ仕諸事御差図之通り相動可申候右ケ条ニ相洩候義申上間敷候其内差立相替義モ御座候節ハ時々御吟味ヲ以テ何分ニモ可被仰付候為後日証文仍テ如件

宝曆十一年巳十一月

豊島屋清蔵

御役人衆中様

をあげている。「六組飛脚屋旧記」の延享元年四月と天明九年正月の六組飛脚屋仲間には豊島屋清蔵は見当らないので、仲間外かどうかは後考にまきたい。

(42) 文化一〇丁卯春正月序十返舎一九「道中膝栗毛」六編上「東海道中膝栗毛」日本古典文学大系62 三三五頁)には、伏見の京橋で大坂の八軒家舟に乗舟する際に、商人が「銭かいなされ。銭はよござりますかな」とある。各地では旅籠などで、金を遂次銭に両替して旅行するのが一般であらう。

通日雇の場合には支払が銭によるものが多かったらう。

(43) 安政元年一二月は「江戸六組飛脚屋仲間」(通信博物館蔵)による。なお万延元年閏三月「江戸六組飛脚屋仲間」(同上蔵)は板本でなく筆写本である。安政元年以外については前稿第一表と同じである。なお嘉永六年、万延元年

は本表の通りに人数を訂正する。

- (44) 雄山閣編輯部編「御府内備考」(大日本地誌大系本) 六卷 二六一—八六頁

- (45) 「東京市史稿」市街篇第五十二 五三〇—六四頁

- (46) 東京都中央区役所編「中央区史」中巻三—四五頁、千代田区役所編「千代田区史」中巻行政区画変遷表、外に「東京市史稿」市街篇第五十 五四四—六八頁、六三七—六七頁の明治二年三月「街衢分合称呼改正」、及び鈴木榮三・朝倉治彦編「江戸切絵図集」(角川文庫)を参照したが、地域別は完全ではない。

- (47) 麹町式丁目二人の内一人は同六丁目、同八丁目一人は同式丁目の可能性がある。

- (48) 東京都立大学学術研究会編「目黒区史」二九八頁

- (49) 幸田成友「増補江戸と大阪」一七頁

- (50) 川崎房五郎編纂執筆「明治初年の武家地処理問題」(都史紀要十三) 二六—七頁

- (51) 「御府内備考」一巻二頁

- (52) 「東京市史稿」市街篇第五十 六八四、六八七頁

- (53) 今井登志喜「都市発達史研究」二五八—六二頁、社会経済史学二巻七号八一—〇頁

- (54) 関山直太郎「近世日本の人口構造」二三八頁

- (55) 喜田川守貞「類聚近世風俗志」第四篇生業上一〇三頁

- (56) 松崎欣一「江戸市街の形成過程」慶応義塾志木高等学校

江戸六組飛脚屋仲間について(統稿)(藤村)

研究紀要二輯五五—六頁

- (57) 「六組飛脚屋旧記」の天明九年の仲間名前書では、日本橋組Aなし、B二、Cなし、京橋組A一、B四八、C三、芝口組A二、B一八、Cなし、大芝組A一五、B二六、C

一、神田組A五、B三九、Cなし、山之手組A六、B一六、Cなし、合計A二九、B一五九、C四である。総計一九二人の内で家主一五%、店借八三%になる。

以上の通りであるから、前稿二四七頁の寛政元年五月の区別は訂正する。

- (58) 西久保普門院前は推置である。

- (59) 芝南新門前巷目丁代地五名の内で、一名は芝南新門前巷丁目、二名は芝新門前巷丁目代地であるが合計した。

- (60) 京橋組に入れてもよい。

- (61) 替地になる。替った場所では第五大区四小区である。

- (62) 松崎欣一「前掲稿」五六、六六頁

- (63) 種畑雪湖「前掲書」五六頁には、六組飛脚屋の所在分布を、万延元年閏三月「江戸六組飛脚屋仲間」により、「組合の地域が大部分に飛離れて相互に入乱れてゐるのは丸の内に於ける大名屋敷を中心として之に配するに中屋敷と下屋敷との連絡を塩梅したる得意関係を考慮したるものである」としている。この点は今後考えたい。

- (64) 伝馬町については、「東京市史稿」市街篇第三 一九二—二〇二頁、見玉幸多「宿駅」一四九—六七頁、同「江戸

伝馬町の助成制度」学習院大学政経学部研究紀要6、松崎欣一「江戸両伝馬町の成立過程及び機能について」慶応義塾志木高等学校研究紀要一輯、同「江戸両伝馬町の道中伝馬運営」史学四二巻一号、同「江戸伝馬町の鞍判制度」史学四三巻一・二号、同「江戸南伝馬町名主吉沢氏の失踪をめぐって——十八世紀後半における江戸伝馬町の伝馬役運営——」史学四四巻二号参照

(65) 「近世交通史料集」三一五—一六頁

(66) 「同右」三三八頁

(76) 三井文庫所蔵

(68) 通信博物館所蔵

(69) 「明治文学全集」4 (成島柳北・服部撫松・栗本鉄雲集・筑摩書房刊) 一一頁

(70) 国立国会図書館蔵

(71) 卯(安政二年)二月藤森引庵「新政談 一名獨言」(日本経済大典)四五巻三四八—五一頁) には、「諸大名供連井手廻り陸尺渡り仲間之事」として、大名の供連の多くは渡り者日雇で、これらの陸尺手廻は悪風を待に移すとし、切又世間に渡り仲間とて、御番所を初今日此処に居候ては、明日は外へ行、其処を不常もの有之候、是等は皆無頼の悪者、一時の間は合候様なれども、取逃・欠落・博奕等を事とし、風俗を破る事はより甚敷はなしと欠落奉公人の実態を記し、さらに

乍然是等は口入と申もの有之、諸事引請仲ケ間を建置、是等の手より入り候はぬものは、勤方差支ゆる様にする故、無抛用ゆるなり、其上急に取逃・欠落する時は、跡代りのものに合兼ねれども、此受負引請居候得ば、直に外人と差替、一時の間欠無之、便利の様に見ゆる故、是を止めたならば差支んと存るもの有之べけれど、(下略)と口入の存在を記している。そして手廻り陸尺には「大概親方と申もの有之、夫々子分を揃居候」とする。この記事は武家屋敷の奉公人の有様を示すので、道中よりも江戸の事と考えられる。口入も人宿ではないかと思うが、六組の一面にもこれに似た性格があったのではないか。

なお文政一三年庚寅冬一〇月序筠庭信節「嬉遊笑覧」巻一下(「日本随筆大成」第二期別巻上二二五頁)の「赤坂奴」と云は徒若党中間等なり」とある赤坂奴が人宿に入るかどうかは不明である。

(72) 国立国会図書館蔵

(73) 東京大学史料編纂所編「大日本近世史料 諸問屋再興調二二三—二三三頁

(74) 国立国会図書館参考書誌部「諸問屋名前帳 細目四(旧幕引継目録6) 一〇—三八頁

(75) 京橋組B一人は尾張屋吉蔵である。彼は明治迄営業を続けている。神田組にも尾張屋吉蔵があり、これは嘉永三年四月に譲っている。番組人宿に加入は文元元年八月で、町

名等は神田組に近く、家主他と年月は京橋組に近い。便宜上京橋組に入れて計算した。

(76) 舞阪町史研究会編「舞阪町史」史料篇一 六七八—九頁

(77) 「東京市史稿」市街篇第五十三 六七九—八〇頁

(78) 「明治文学全集」4 二二七—二〇頁

(79) 柴田宵曲編「幕末の武家」一七三—四頁

(80) 「同右」七頁

(81) 箱根の三については、「三島市誌」中巻五六二頁に、江戸の久保町の元締万伝が子分にしたと、大略同様の話を「武勇伝雲助往来、白根凌風、話所載」として引用している。

又宮崎三昧「雲助」には、京橋の丸久という元締の子分で小定と云う小差と、雲助の備前シゲの話がある(一七九—一八〇頁)が、「三島市誌」中巻四六四—七頁には、小田原の今戸長吉(小田原米五の子分)の談があるがと前置をして、戸羽山翰が古老の田島八百蔵翁からの聞書を記している。備前繁(慶応三丁卯年歿)とあり、丸久は江戸京橋の人足口入稼業とある。

(82) 樋畑雪湖「江戸時代の交通文化」五五—八頁、田村栄太郎「一揆雲助博徒」(史録叢書2三崎書房版)九九—一〇三頁、「品川町史」上巻七九四—八頁、東京都品川区編「品川区史」通史編上七二七—三〇頁は通日雇についての研究である。

江戸六組飛脚屋仲間について(統稿)(藤村)

(83) 郵政省編「郵政総合年表」(「郵政百年史資料」二九卷)六一—二頁、なお山本弘文「維新期の街道と輸送」二二—五九頁参照

(84) 「駅通明鑑」巻四第十四篇雜事ノ部ノ二 一三四—五丁

(85) 「同右」巻二第四篇官信通送並ニ公私飛脚ノ部ノ二 一四八丁(「郵政百年史資料」二二卷四五頁)

(86) 金子一郎「転換期の飛脚業(1)」JPC 一四—号三—五頁

(87) 「駅通明鑑」巻四第四篇官信通送並ニ公私飛脚ノ部ノ三 四〇—一、四六—八、五〇—三丁(「郵政百年史資料」二二卷九九—一〇一、一一—二五、一一九—一二、一二四—五頁)

(88) 「諸問屋名前帳 細目四」二三、一四、二六、三一、四〇、四一、四二、四六頁

(89) 元文四年一〇月の三伝馬町中合の「定」にみえる人足頭は「(東京市史稿)市街篇第三十 七三六—四三三頁」、寛政元年二月改(七四五頁)に

一御朱印人足請負金之義、古来々五間口寄人役と相定、尅々年分金尅尅三分宛、人足頭共連印を以、銘々直受取ニ致、右金子を以人足相勤来候処、不取締ニ付、三町内金高之儀は、是迄之通ニ而、以来三町年寄押切を以、伝馬行事印形ニ而尅々年ニ四度ニ集之、帳箱江入金致、月々前金ニ人足頭共江相添候等、此度相改候ニ付、三町中人足役金、左之通相集可申候事

として、惣金一一八兩一分二朱と六匁の集めた金の中で金一一三兩三分が人足頭請負金尅々年渡シ高である。その内訳は本役請負四人は金一六兩一分宛、半役請負六人は金八兩貳朱宛である(七四六頁)。

そして人足頭拾人の内で本役四人に金貳分宛、半役六人に金一分宛、毎年暮に合力する事になっている(七四七頁)。

次に「御伝馬方旧記」(「近世交通史料集」三卷八四―五頁)には、享保一三年四月兩伝馬町名主月行事中宛に小網町壱丁目源兵衛請負人権兵衛の日光御用御長持通シ人足賄方請負証文と、同大伝馬町貳丁目久右衛門店請負人越前屋清右衛門の日光御用長持拾棹御櫃三箇の通シ人足請負証文がある。

この人足頭と兩伝馬町宛の通之人足請負人と御伝馬人足世話方との関係は今後にまちたい。

(90) 「駅通明鑑」卷六第十三篇郵便ノ部ノ二 一九八丁(郵便百年史資料) 一二卷五二四頁)

(91) 「同右」卷十一第十四篇郵便ノ部ノ三 一二二丁(同右) 一二三卷五七三―四頁)

(92) 「同右」七五―六丁(同右) 五〇―一頁)

(93) 柳田国男「明治大正史 世相編」(「定本柳田国男集」二四卷二五五頁)に、人力車の普及について「つまり是だけがあつた時代の手頃の職業であつたのである。最初には勿論雲助の失業者が入つて来たが、士族でもたゞ腕力しか持合せないものは、零落して是に加はつて居た。村でも屈強な者から追々に出て是に働いた」とある。通日雇人足についても可能性はあるだろうが、実証は現在の所ではない。

(補1) 三井文庫所蔵

(補2) 東京都立日比谷図書館蔵、幸田成友旧蔵慶応義塾図書館蔵

(補3) 東京都立日比谷図書館蔵

(補4) 児玉幸多執筆「品川区史」通史編上七二七―八頁

後記 本稿の作製について、国立史料館、国立国会図書館、通信博物館、東京都公文書館、東京都立日比谷図書館、慶応義塾図書館、三井文庫には所蔵史料、圖書の利用を許可された。伊東弥之助、田中康雄、松崎欣一、白石克、橋本輝夫、片倉比佐子、金子一郎、原島陽一、鎌田永吉の諸氏にお世話になった。記して感謝したい。

